

Texas 満喫ドライブ

2006 年 12 月 23 日 ～ 31 日

嬉しいことに、こちらはクリスマスには従業員がバケーションをこぞって取りますので仕事になりません。というわけで日本からアメリカに進出してきている企業は、この時期にシャットダウンとなります。日本のお盆休みのようにかなりの長期休暇になりますので、この期間を利用して、アメリカ大陸の自然を観察するために遠出をして見ました。こちらのドライブでは、西部劇の舞台の地を訪ねるというこだわりを持っていますので、今回は、デビークロケットの活躍した「アラモの砦」を尋ねることにしました。

それと、お目当ては、ヒューストンにある「NASA のスペースセンター」。ここは、管制室のあるところで、以前に日本のつくばにある「宇宙航空センター」の管制室にも入れていただいたことがありますので、両方を比較すると言うのも、なかなか胸を躍らせるものがありました。

コースは、とにかく南に行くこと。冬ですのでアメリカ大陸の南を観察するにはもってこいの時期なのです。

今回のコースと宿泊地は次の地図の如くでした。



それでは、その旅の記録を暇に任せて楽しんでください。

テキサスドライブ、準備編

カウボーイの話は、テキサスから牛を追って、オクラホマを越え、カンザス辺りまで旅を続けます。ワイオミングや、アイダホ、ネブラスカ、サウス・ダコタ辺りも彼らが活躍した舞台です。これまで、北の方ばかりに気をむけていましたが、今回、初めて、日の短い冬に南の地域を、カウボーイの姿を思い浮かべながら走りまわって来ました。

クリスマスから、正月にかけて、アメリカの工場はシャットダウンをする。といっても、顧客のホンダ、ヤマハ、カワサキの生産計画にあわせての休みである。冬は、コロラドやワイオミングなど、大好きな山ドライブというわけには行かない。かといってネブラスカの東や北も緯度が高いので、天候次第で雪となる。そんなわけで、この長い休みは南にドライブをするしかない。一度、インディアナにいたときにガルフコースト、ニューオーリンズまでドライブしたことがあるが、今回は、長期の休暇であるので、思い切り、テキサスを縦断し、メキシコ湾の潮騒の響きを聞く、さすらいの旅をすることにした。

テキサスには、デビー・クロケットでお馴染みの「アラモの砦」、ここは、アメリカに在る間に是非一度尋ねて見たいと思っていた場所、そして、ヒューストンがある。もちろん、ヒューストンと言えば、「宇宙航空管制センター」のあるところ。ここを訪れない手はないとかねがね思っていたので、ここを見学することを中心にドライブ旅行の計画を立てた。

コースは、ネブラスカから、カンザスを通り抜け、オクラホマに行き、そこから、テキサスに入る。ただ、インターステーツを走れば、時間は節約できるが、大都市を基点にしている道路で、あまりその土地にある、偶然の発見を期待することはできない。というわけで、できるだけ、カントリーハイウェイを走ることにした。というわけで、テキサスには、大都市であるダラス、フォート・ワースを避け、ウィチタ・フォールという町から、できるだけ西のコースを南下し、サン・アントニオに行く。ここに、念願の「アラモの砦」がある。そして、できるだけ時間にゆとりを持たせた旅にするために、一気に南に下り、**Corpus Christi** という、メキシコ湾岸に止まり、ここからガルフコースト沿いにヒューストンに行く。ヒューストンで一日費やし、その後もまた、ガルフコーストにコースをとり、メキシコ湾の風を肌で感じてくるというもの。

帰りは、ルイジアナまで入り、テキサスとの州境辺りを北に登る。そして、アーカンサスを縦断して、**Missouri** に入るというもの。**Missouri** 州では、「小さな草原の家」の作者であるローラ・インガルス博物館のある **Mansfield** という街を訪ね、その後は、**Lewis**

と Clark が辿った Missouri 川沿いにその形跡を追う。これが当初の計画。

時間と、その土地の魅力を考えながら、宿泊する場所を決める。そして、コースにしたがって、距離数を求め、所要時間をつけたタイムスケジュールを作るのだ。宿泊は、一人旅の気楽なものなので、安いモーテルを泊まり歩く。ただ、寝るところを確保するだけのもの。此方は、自動車社会だし、全国をトラックに乗って走り回っている人がいるから、何処にいても飛び込みで宿は確保できるし、一泊 30~40 ドル程度で何とかなる。今回は、いつも一人旅の時に利用する全国ネットでモーテルを展開している「モーテル 6」を利用することにした。此方のホテルの料金は、ツウィンで一部屋料金。二人なら割り増しは数ドル程度。だから二人旅ならすこし高級なモーテルに泊まっても一人当たりではせいぜい 40 ドル程度であるから、かなり贅沢ができる。一人では、モーテルでは、パソコンにカメラのデータを落とし、一日のドライブメモをとり、あとは、ビールを飲んで休むだけであるから、なにも高級ホテルに泊まる必要もない。というわけで、一人旅の時はもっぱらこの「モーテル 6」を利用する。大体主要な都市にはあるし、これが一冊の本にまとめられているので、このホテルに目星をつけて泊まる町を選択した。

コースを選ぶには、夕方、到着できそうな都市の近くにこのモーテルがあるかどうかを確認し、適当なものがあれば、今度は正確にコースを決め、所要時間を計る。こちらでの走行距離は、夏なら、夜 8 時くらいまでは走ることができるが、冬では、4 時半くらいを目処にする。一時間当たりの距離は、ざっと 60 mile で計算する。これなら、所要時間もマイル数と同じであるので、計算が簡単というわけ。インターステーツで休み無しに走るなら、すこし時間的なゆとりが出てくる。その分は途中の休憩時間に当てたり、ビジターセンターでの時間とする。カントリーロードでは、この走行距離は無理。この足りない時間が大体、一日で、1 時間くらいになる。これに、途中の、見学時間、食事の時間などを加えてやれで、かなり正確に一日の移動距離が計算できるというわけ。

こんなことを前提にして、アトラスの道路地図帳を引っ張り出し、州から州にかけて、いろいろなコースを選択してゆく。この地図には、その場所のめばしい文化施設なども書かれている場合がある。こうした場所は、行って見て、当たり外れはあるにしても大体一見の価値のあるところ。できるだけ、その近くを通るときには、たとえすこしの時間でも、回り道をするように心がけている。ところがインターステーツにのると、なかなかそうは行かない。これまでも何度か、この案内を見て、何の気なしによったら、これがまた、その地域の名物であったり、途轍もない由緒のある建物であったりすることがよくあった。まさに、これこそ、ちょっと時間はかかるがカントリーロードを走る醍醐味でもある。ついでに、カントリーロードを走ると、その途中のまちまちのコートハウスや教会などを目の当たりに見学することができる。特に中を覗くわけではないが、何処の町にも、こうした建物が町の中心地域にあり、しかも、立派そのもの。コートハウスは、町の中心のロータリーの中に立っている。つまり、コートハウスを中心にロータリーができていて、ここ

で道路は周回するようになっている。このロータリーには、古めかしい、まさしく、この町で一番振るいホテル、そして、いかにもよき時代を思い出させてくれるサルーン、地元の手工芸品を売る店、もちろん、リキュールストアーなどもあって、車も自由に止めることができる。すばらしい建物を見ながら一服というのが定石。昔は、牢獄の役目をしていたというこのコートハウス。とにかく頑丈そのものにできている。いかにもいかめしく、また、重厚そのものであり、その町の歴史を一目で感じることができる。今では、この建物は、役所になっているところがほとんどだ。

地図で、ドライブコースを見ながら、その途中にある町の名前をひとつひとつ拾って行く。時間があれば、インターネットでその町の歴史なども調べることができる。こうして、すこしでも予備知識があれば、その町に近づくとどんな発見があるのか、胸がわくわくしてくる。田舎道を 60mile 程度で飛ばしていると、まず、墓場がある。これは、町のはずれにきた証拠。すると、「この先、速度制限ありの標識」。速度を 50 マイル、45 マイルと落していく。町の中に入ると 30 マイル。学校の区域になると 25 マイルというのが通例。そして、ちょっとわき道を見ると、そこがその町のメインストリートになっている。立派な教会の塔は、遠くからでも分かるので、そんなときにはいつも、寄り道をして、教会の建物を見物してゆくというわけ。すると、その隣にコートハウスが堂々と建っているのを見つけることができるというわけだ。

そんなことを想像しながら、コースと時間の調整をしているときに、また楽しいひと時だ。何度も、何度もコースを変え、時間を計り、寄り道の場所を決め、こうして、止まる場所を大体定め、そこのモーテルに予約を入れる。車社会、自分で運転して長旅をするひと、何日もかけて仕事場を移動することなど此方では、こうした人のために、どんな小さな町にもモーテルがある。だから予約は必要ないが、言葉に不自由をしているわれわれとしてはいざという時に、泊るところがあらかじめ決まっていれば、精神的にゆとりがある。というわけで、今回も、8 日間の泊るモーテルにはあらかじめ予約を入れることにした。「スーパー 8」というモーテルのチェーン店の場合には、インターネットで予約できるが、今回利用した「モーテル 6」はまだ、電話で予約をするシステム。自分の英語がどれだけ通ずるかの心配はあるが、他に頼むわけにもいかず、携帯電話から予約を入れる。一箇所うまくいけば、あとは大体同じパターンだから、あらかじめ、聞かれることは返事を用意しておく。

大体が、

「禁煙か喫煙か」

「大人の人数と、何泊か」

「住所は？」、「支払の方法は？」

位である。そして、「キャンセルは 6 時まで。予約番号は……です。」

で予約が済むというわけ。

こうして、自分で何もかも準備し、持ち物もリストを作っている、これにしたがって

準備する。

それでも、忘れ物はある。が、こちらは車であるので、何処の町に行っても、買い物ができる。また、アメリカのスーパー「Wall Mart」は、何処の町のものも、品物の並べてある順序が同じだから、地元で買い物をしているのと同じ感覚で買い物ができる。これはなかなか便利。というわけで、忘れものもあまり気にしない。

ただ、ドライブであると便利なものは、

キッチンタイマー。 地図をみて、あと何マイルかというのが分かれば、これをタイマーにセットしておく。計算は、一分、一マイルとしてセットする。すると、しばらく走ってから、あとの残された距離、そして、自分が走った距離が、このタイマーで直ぐに分かるというもの。何しろ、気促な、かつ、無責任を地で行くような一人旅。折角地図をみて、後何マイルで、何号線にでて、そこから、何マイル北に走れば、そこに目的の町がある、などと頭に入れても、ドライブをしているあいだに、「オッ。あれはなんだ。」とか、「あーっ。気分爽快。君も幸せそうかい？」なんて、駄洒落をいつている間に、さて、どれだけ走るんだったけな、なんて、先ほど調べたことはすっかり忘れてることなどしばしば経験した。だから、このタイマーは、特に、物忘れのひどくなったわれわれには強力な武器というわけだ。

地図は、アトラスのものが非常に便利。 但し、各州の公式マップが何処のビジターセンターにもある。これを手にいれれば、その州の主要な都市の詳細な地図も分かる。ただ、それでも、細かいところは分からないので、その場合には、インターネットであらかじめ地図を打ち出しておく。とくに知らない町での場所探しは、ストリートの名前もなかなか読みにくいので、とても苦勞する。暗くなればなおさらである。そこで、今回は、毎晩の泊るモーテルの詳細地図を必ず準備することにした。これはとても心強い。モーテルには大きな看板があるが、これが大体一回か二回程度の道の確認でできるくらいであったから、とても助かった。とにかく、事前の情報はインターネットで何でも準備しておくことが望ましい。

遠近メガネ

歳をとり老眼が出てきて、近眼メガネでは近くが見えなくなってきた。だから、ドライブをしているときはメガネをかけているが、道路などを地図で調べときは、メガネがいない。メガネをかけていては細かい字は読めない。そんなわけで、いちいち車を止め、メガネをはずし、細かい字を確認しなければならない。そんなときに、普段はあまりかけていない遠近両用のメガネが随分役にたった。とにかく、ハンドルを握りながら地図を広げて、一瞬のうちに道路標識を読んで、自分の走っている場所を確認しなければならないのだから、かなりのテクニックを要する。そのときのキーポイントは、しっかりと字を読み取ることができること。全部は分からなくても、かしら文字だけでも分かれば助かる。ということで、大都市で地図を見ながら、ストリートを確認しなければならないときには、

遠近両用メガネを掛けることにした。しかし、普段、あまり使用していないので、長時間かけていると目が疲れるので、これもまた、今後の課題である。

固定式のビデオカメラ

助手席にビデオカメラを固定するようにしている。そして、めばしいところにきたら、片手で簡単に操作ができるようにした。おかげで、走りながらでも、これはというところでは撮影をすることができる。旅の途中の景色はなかなか記録しにくいものだが、これなら、あとでじっくりと観察することもできるし、そのときの興奮も伝わってくるので、とても楽しみだ。とにかく、一度きりの出会いとなる景色ばかりなので、取り捲りのビデオである。編集するのも大変だが、あとで、その場の雰囲気を感じずるにはこれに限る。

充電器

携帯電話は、事故に遭遇したときの緊急連絡用に用意した。充電器を携行するが、いつ電池がなくなるか分からない。とりわけ、一日中、動き回っているので、自動車の電源からいつでも充電ができるようにしている。これは、ビデオにしても、また、デジタルカメラにしても同じ状況。最近では、自動車の電源からこうした携帯用機器の自動充電ができるようなアダプターが販売されているのでこれを購入した。この充電器の利用にしかたは、他にも、DVD再生機やパソコンなども利用できるから、本当に心強い。もちろん、エンジンをかけていないとバッテリーが上がりかねないので十分に注意をする。

旅先のさまざまな情報

アメリカの田舎では、人口が数千人もいれば、立派な町だ。そんなところには、歴史を思わせるコートハウスや、宗教の力のすごさを感じさせる見事な教会がある。そんな町の情報を下調べしておけば、これは、すこし時間が余ったときにちょっと立ち寄りができるので是非実行したい。ところが、いって見ないと分からない情報もたくさんある。何処の州でも、主要な幹線道路の州の入り口の町には、ビジターセンターというのが充実していて、その州の町、観光地、ホテル、リゾート地、行楽などの情報が何でも手に入る。ただ、残念なことに、こうしたパンフレットはそこの州に行かないと手に入らない。事前の手元にあれば、観光などももっと効率的にできるのであるが……。

情報はインターネットでも手に入る。アメリカの各都市、町では観光に非常に力を入れている。というより、たまたま、その町を訪れた人を、心から歓迎するという態度が伝わってくる。これがうれしい。だから、「エッ。こんな小さな町でもサイトがあるの。」というようなことがしばしばある。そういう意味で、事前の訪問予定地のウェブサイトを見ておくのも必要なことだ。

ちなみに今回宿泊した町のインターネットの情報の例

Lawton の町

Lawton's History

[City of Lawton Home](#) >>[About Lawton](#)>> [History](#)



The town of Lawton was founded August 6, 1901, when the last of the Indian lands in the Oklahoma Territory, the Kiowa-Comanche-Apache reservation, was opened by the federal government for settlement. In contrast to [land runs](#) used in other parts of the Territory, a lottery was established to distribute the land in 160-acre plots. A person wanting a claim had to register for the drawing. On July 10, 1901, registration opened at Fort Sill and at El Reno, Oklahoma. About 29,000 "wannabe" homesteaders from all over the United States journeyed into the southwest Oklahoma Territory to register at Fort Sill during the 16 days registration was open. Another 135,000 registered at El Reno. Lottery planners in Washington, D.C. had not foreseen so many people wanting land in that part of the country. The drawing began July 29th at El Reno, and only 6,500 were lucky enough to be selected for a homestead in each of three districts, one of which was Lawton.

The Lawton town site was located on a section of prairie south of [Fort Sill](#), a military post which had been set up as a cavalry fort in 1869. Lots within the 320-acre town site itself were sold at public auction. Beginning on August 6th, winners of the land lottery chose their plots outside the town

site in the order that their names were drawn. The [home of Mattie Beal](#), a woman whose name was the second to be drawn in the lottery, still stands in the south central part of Lawton, on a portion of the 160 acres she selected. It has been completely restored and is listed on the National Register of Historic Places. ([More information on the Mattie Beal home](#))

Having sprung up almost overnight with little prior planning, Lawton had no form of municipal government at its outset. Townspeople, living in tents for many months, were busy building homes and businesses, and setting up a government was not a high priority. Since Lawton was established as the county seat of Comanche County, it was first ruled, then, by the county government appointed by the governor of the Oklahoma Territory. In late October of 1901, an election was held, and the Lawton city government was formed. The first officers elected were mayor, city clerk, judge, treasurer, city attorney, street commissioner, city marshal, eight city councilmen, a school board treasurer, and eight school board members. This mayor-council system lasted until 1911, when Lawtonians voted in a charter-commission form of government with three commissioners. In 1921, Lawton again switched governments, to one of five commissioners and a city manager. Then a year later, voters repealed the charter and returned to the politically aligned mayor-council form of government. This form lasted for 50 years, when in 1972, voters adopted a charter and the council-manager system, which is still in place today.

Lawton faced many problems during its early years. In the first days, there were an estimated 25,000 people living in tents. There were no streets or sidewalks and no utilities; schools were few and overcrowded, the water supply was inadequate and unclean, and fires were difficult to contain. Hopes of Lawton becoming a thriving metropolis surged, then faded from one disappointment to the next. Its 1910 population was under 8,000. Numerous mining claims in the nearby Wichita Mountains failed to produce gold ore. A proposed railroad linking Lawton with trade from the east was abandoned when oil was struck west of Ardmore. Oil drillings in the Lawton

area proved to be shallow and barely productive. Despite these obstacles, Lawton continued to grow, slowly and steadily at times, and in great spurts at others. By 1950, population had increased to almost 35,000 and mushroomed to over 80,000 by 1990. Much of its growth came with the establishment of the Field Artillery School at Fort Sill. Throughout the years Lawton and Fort Sill have worked in cooperation to become one of the finest military communities in the country.

Texarkana の町の観光案内情報

Visitor Guide

Things to See and Do:



Visit Texarkana and you'll stay for the good life. With so many family friendly activities, lakes & woodlands, antique shops, parks, ballets, concerts, gallery shows, museums, historical sites, golf courses and rodeos to

choose from, you'll see why – in Texarkana – life is so large it takes two states!



This listing only includes a few of our fine attractions. For more Texarkana area member attractions [click here](#) to search our business directory.

STATE LINE POST OFFICE AND FEDERAL BUILDING

500 State Line Avenue



One of the most unique features of Texarkana is the ONLY U.S. Post Office sitting in two states. This Post Office straddles Texas and Arkansas and has separate zip codes, 71854 for Texarkana, Arkansas and 75501 for Texarkana Texas. Built in 1932-33 the structure features a base of pink granite from Texas and walls of

limestone from Arkansas. Interestingly enough Texarkana boasts this to be the most photographed courthouse in the United States; second only to the Supreme Court in Washington, D.C.

UNIQUE PHOTO OPPORTUNITY AT PHOTOGRAPHER'S ISLAND!

Experience a truly unique photo opportunity straddling Texas and Arkansas at Photographer's Island, located in front of the Post Office. When you're ready for a photo so large it takes two states, come strike a pose on photographer's island! 500 State Line, Texarkana, USA.

SCOTT JOPLIN MURAL

311 Main Street

Check out the Scott Joplin Mural! A colorful, outdoor mural which depicts the life and accomplishments of the Pulitzer Prize winning composer and area native, Scott Joplin. The mural also features accurate musical notes of the final measures of Joplin's famous song, The Entertainer. This catchy tune stirred a revival of interest in ragtime music. Located on the south wall of the building at 311 Main near the Perot Theatre.

HISTORIC PEROT THEATRE

219 Main Street

Marvel at the Perot Theatre located in downtown Texarkana. The theatre is a jewel in the region, bringing the best of Broadway, classical music, ballet, jazz, modern dance and more to Texarkana. First opened in 1924 as the Saenger Theater, Emil Weil's Italian Renaissance design is an architectural marvel. Through the generosity of native son H. Ross Perot, his sister Bette Perot, and area residents, the beautiful old theatre was saved and restored into one of the nation's major performing arts centers. Throughout the year, the Perot Theatre Series brings



national and international productions to the region.

To schedule a tour, call TRAHC, 903-792-8681.

The photo of the Orchestra and Balcony Boxes shows the beauty of the plaster

and design features that adorn this beautiful theatre. The theatre is on the National Register of Historic Places.

REGIONAL ARTS CENTER

4th & Texas Boulevard



The beautifully renovated Regional Arts Center began life in 1909 as a United States District Courthouse. The old courtroom is now a grand hall with a 26-foot-high ceiling. National touring art exhibitions grace gallery walls 12 months a year, and the halls ring out when the rolls are playing on the unique reproducing player piano. The building is an example of Classical Revival architecture featuring ornate plaster, a copper cage elevator, and a grand hall with a 26 foot ceiling. Today the Center serves as the focal point for the visual arts and houses the only art museum in the region featuring national touring, juried and invitational exhibitions. The year-round programming also includes classes, lectures, workshops, film series and tours. Also inside the Center is the "For Arts Sake" Gift Shop filled with unique gifts. Not to be missed! For further information, contact TRAHC, the Texarkana Regional Arts and Humanities Council, Inc. P.O. Box 1171, Texarkana, TX 75504, or call (903) 792-8681.

MUSEUMS:

ACE OF CLUBS HOUSE

420 Pine Street, 903-793-4831

Don't miss the Ace of Clubs House, uniquely designed and built in 1885. Legend has it that entrepreneur James H. Draughon built the 22 sided house with the winnings from a poker game and that the winning card was the Ace of Clubs. Each room represents a specific period in the history of the house and reveals interesting insights into the life-style of the families who lived there.

Open Tuesday - Saturday, 10 am to 4 pm. Admission: Adults-\$6, Students-\$4, Senior citizens-\$5, children under 5-Free. Group tour rates and guided tours are available. Last tour begins at 3:00 pm.

MUSEUM OF REGIONAL HISTORY

219 State Line Ave., 903-793-4831

"Located in the oldest brick building in Texarkana, the Museum of Regional History offers a wide range of exhibits. Visitors will enjoy an interactive musical exhibit dedicated to Scott Joplin, the "Father of Ragtime Music." Other displays depict the early history of Texarkana. There is also

an exhibit that focuses on the Caddo Indians and includes Caddo pottery, tools and other artifacts. First floor galleries offer changing exhibits related to Texarkana history."

The Museum is open Tuesday - Saturday, 10 am - 4 pm. Admission: Adults \$6, Students/Children age 5 and up \$4, Senior Citizens \$5, Children under five Free.



DISCOVERY PLACE MUSEUM

215 Pine Street, 903-793-4831

The young and the young at heart will enjoy looking into the past and future while visiting this unique museum. The Discovery Place Museum has a one-of-a-kind 12 ft. sound wall, giant animal murals, and large scale hands-on permanent exhibits focusing on science, history and human perception. A special dress-up theatre and tot spot for younger visitors also create an atmosphere where learning comes alive for the entire family. Open Tuesday - Saturday, 10 am - 4 pm. Admission: \$4 per person, children under five are FREE.

TEX-ARK ANTIQUE AUTO MUSEUM

217 LAUREL Street

The auto museum located between Third and Broad Streets in downtown Texarkana, Arkansas, had its grand opening on Saturday, September 10, 2005. It is now open from 9 am to 4 pm on Saturdays and from 1 pm to 4 pm on Sundays. Through the week it is open by special appointment.

The Museum contains a rotating (every three months cars are changed out) display of some 22 vehicles representing 4 to 5 decades of auto manufacturing along with varied automobile related items for your viewing pleasure. The Museum does not charge admission, but it does accept donations. A library with automobile related books, periodicals, and newsletters is also on the premises.

逆に、役に立たないもの。

車に、方角指示器を取り付けた。これは、車がどちらの方角に進んでいるかというのを一目で知らせるもの。しかし、今の自動車は随分と電動化されていて、電気配線がすごい。なかには、電流がかなり流れている配線があるのであろう。私の車の場合、そのおかげで、いつも磁石の向きが車の向きと共に一緒。だから、折角の磁石の方角指示器もなんの役にも立たなかったというわけ。アメリカの道路標識は、道の番号と、NEWS 東西南北が基準であるので、自分の走っている方向が分かると随分と楽かと思い、取り付けたが、結局はこんな結果になってしまった。

旅の楽しみは、こうした事前の準備をしている段階で、自分がその地に居るような気分で、あれこれ想像することではないかと思う。未知の世界と、憧れの夢の実現と、そして、実際に、それを達成しようという心の高まりが、幾つになっても旅をさせる原動力のような気がするのですが、これは、私だけのことでしょうか。

というわけで、さあーッ。いよいよ、出発だぁー。

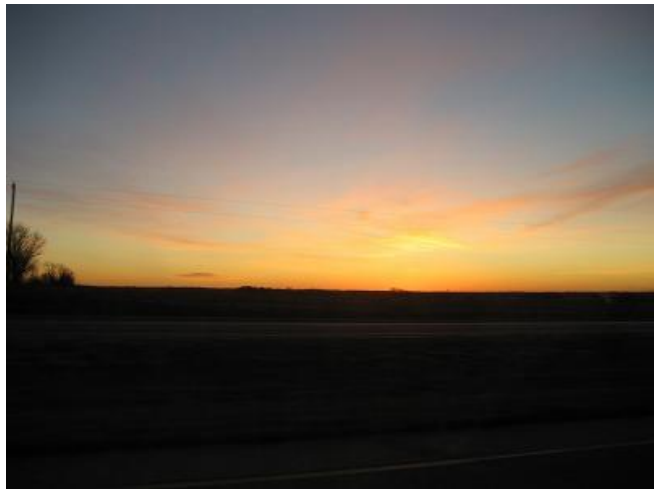
テキサスドライブ 一日目

12月23日

さあ、いよいよ、出発。まだ見たこともないテキサスの大荒野を目指して、これから片道、ざっと 1,000 マイルのドライブです。念願の「アラモの砦」と Houston の「NASA の航空管制センター」を見学しようと言うわけです。まさか、まさかと思っていましたが、さあ、現実の話となると胸躍るばかりの興奮状態です。今回は、冬のドライブでもあり、また、9 日間の長旅ですので、工程はかなり余裕を持って組むことにしました。それでも、目的地に付くまで、ここから、カンザスを通り、オクラホマを抜けるまでは時間を節約したいと思い、朝、早くの旅立ち。

気象の状態は、コロラドに猛烈な寒波が襲い、東隣のネブラスカのかかなりの部分まで雪が降ったり、道路が凍結の状態。そんなわけで、この日の予定のコースは、インターステーツ 80 を西に向かい、York という町から、81 号を真っ直ぐ南に下る予定でした。しかし、前日の予想では、I-80 がかなり危険な状態ということで、急遽、リンカーンから直接南に下る 77 号線を走ることに。まあ、こんな変更が自由にできるところが一人旅の気安さかも知れません。

コロラド辺りの荒れ模様と同様、テキサス辺りの天気もあまり芳しくないようだったので、ちょっと此方のほうが気がかりでした。でも、天気は、メキシコからテキサスにと西から変わってきますので、ひょっとして、テキサスにつく頃までには天気も回復するのではとの期待を込めて、アクセルを踏む。



77 号線を下りながら、途中、Beatrice の前で、朝日が昇ってきました。此方の朝日は、地平線から上がってきますので、夜が次第にあけ、暗闇の世界が時間と共に

こんな朝日に見送られて、さあ、出発です。

赤くなり、ドンドン明るくなっていくのは、何時見ても、これから先になにかよいことがおこりそうな錯覚を覚えさせるほど、とても素敵なものです。

このルートは何度も行ったり来たりした事のある道ですので、カンザスとの州境まで、一揆に走りました。が、それにしても、ネブラスカのカントリーハイウェイに比べて、カンザスのハイウェイの道のいいこと。車が全然振動しないのです。こんな道を走っていると、時速 60 マイルくらいでも、周りに車はいないし、広大な平原の景色は少しも変化をしませんので、スピードを出しているという感覚は全くありません。まあ、こんな感覚のド

ライブは、日本ではちょっと経験できないのではないのでしょうか。

こうして、無事、カンザスに入る。そして、周りの景色に緑が生き生きしているのが印象的。それだけでも、ここは、ネブラスカよりもかなり暖かという感じがする。農場などもよく整備されていて、トウモロコシしかないネブラスカとは大分違うようだ。

いつもは、ここから、真っ直ぐ南に向かい **Manhattan** という街に行く。ここには、カンサス大学の分校等もあり、学園の街。しかし、今回は、テキサスでは、できるだけ西を走りたいと、できるだけ斜めに西に走ることにした。といっても、アメリカのこの辺りの道路は殆どが東西南北に走っているから、結局はあまり変わらないのであるが……。というわけで、今回は、**Junction City** という街を通る。ここで、ガソリンを補給。すでにネブラスカをでて、150 マイルくらい走っている。



カンザスの典型的な農村を走るハイウェイ。

ここから、71 号線を南に走るわけであるが、とにかくカンザスの平野は広い。ハイウェイから見える景色は、地平線まで道路が真っ直ぐ突っ走っている。そして、ずーっと向こうの地平線と所まで行き着いても、また、その向こうの地平線のところまで何もないのである。山がない。ビルがない。景色をさえぎるものがない。

というのが、このアメリカの大平原の印象だ。

カンザスには、大きな都市は、**Kansas City** と **Wichita** という町であるが、州都は **Topeka**。Kansa も Wichita もこの辺りに住んでいたインディアンの部族の名前である。

時間の節約にと、カンザスの南はトールハイウェイを走る。日本では、高速道路といえど、渋滞していてさえ、何千円と取られるが、こちらの有料道路は、2 ドル、3 ドルの世界だ。これでは、料金を徴収する人の人件費も出ないであろうが、それでも、カンザス、オクラホマ辺りの高速では料金を取るところがかなりある。たしかに、この有料道路は本当にインターが少ないし、道路もよく整備されているから長距離を走るにはとても楽なような気がする。35 号線という有料道路にのり、一揆にオクラホマに入る。

そこで、今一度、周りの景色の緑の豊かさにびっくり。カンザスよりもさらに緑が成長しているのである。ネブラスカよりカンザス、カンザスよりもオクラホマという感じで、また、農場の広さも桁が違う。ハイウェイを走る車は、クリスマス休暇をリゾート地で過ごす予定なのか、乗用車を牽引しているキャンピングカーが余計目立つ。なかには、車を載せたトラックを、引っ張っているトレーラーなんていうものもある。

カンザスの南北の長さがおよそ、200 マイル、300 ㎞位の距離であるが、これを一走りで突き抜け、オクラホマに入るといよいよ遠くに来たなという感じがしてくる。

オクラホマシティーからは、南にダラスに向かうというのは避け、西へ西へとコースを取った。テキサスの Wichita Fall という街からテキサス・ドライブをする予定であったが、この日の宿は、その手前、Lawton という街にモーターを予約した。この Lawton という街にも立派な有料道路が走っている。この道路に入れば、簡単にこの日のドライブは終わるというところであるが、問題は Oklahoma City での、道路状況。流石に大都



カントリー・ハイウェイの脇にはこうした、歴史マーカーが至るところに建っている。

市だけあり、道路がここに集中している。南北に走るインターステーツ 35 と、東西に走る 40 号、これは、アリゾナを横切ってくるものであるが、これに、斜めに走っている 44 号が交差するのである。街のなかは、縦横無尽に高速が走っているという感じで、よそ者には、一体どのコースを取ればよいのなかなか分らない。というのも、都市の周辺での高速道路の案内は、ダウンタウンに行くには、ここで高速を降りろ、とか、ここで降りれば、どのストリートに行くなどという案内が矢継ぎ早にでてきて、70 マイルくらいで走っている



ので、横文字を読むのに不自由しているわれわれには、アッという間に、標識を通りこしてしまうのである。こんなわけで、知らずうちに、高速を降りてしまったり、高速を降りるつもりが、道なりに強制的に高速に乗ってしまったりと、緊張のしっぱなしである。それでも、此方の高速は一般には、無料であるから、間違えても何度でもやり直せばよいと気楽なものである。こんな調子で、Oklahoma City をぬけ、目的の 44 号線に

Lawton の街の歴史博物館の横にあった、砦のあと。

入るのには随分苦労をしたが、どうにか、それと思しき標識を確認することができ、そうなるといい気なもので、この有料道路を人並みに飛ばして走る。

そして、オクラホマのかなり南の地域に位置する **Lawton** という街に無事入る。びっくりしたのは、時間がすでに、4時半なのにまだ辺りが明るいのである。そうか、南に下ったばかりではなく、西にも来ているので、すこし夕方、日が沈むのが遅くなっているのだ。**Lawton** に近づいて、ふと遠くを見ると、小高い丘が見えている。そうだ、この大地にも起伏があるんだという実感が湧いてくる。あとで調べたら、**Wichita 丘陵**というのだそうだ。この辺りに住んでいた、**Wichita 族**の遺跡が随分残っているとのことである。



このドライブ旅行が夏のドライブと違うのは、日が短く時期なので、できるだけ速くホテルにチェックインするようにした。この日のチェックインは 4 時半にすることができ、まだ、外は明るいということで、カウンターで、この Lawton という街の地図をもらう。ふと見ると、なんと Museum があるではないか。しかも、五時まで開いているという。これは、今からでも間に合うとばかり、知らない街を、地図を片手に博物館探しをする。



展示されていたインディアンの文化遺産。

そして、辿りついたのが、Lawton の歴史博物館。入り口でまでいいかと聞いたら、「あと、20 分で締めます。それまでどうぞ」という。しかも、時間がこの時間だから、入場料は要らないという。なんと、粋な計らい。一緒に駆けつけた三人の若い奥様連中は、この博物館の 2 回で展示していた同窓会の写真展を見にきていた。私は、ひとり、博物館を掛け足で見て回る。が、ここには、インディアンの文化を紹介したものが一杯展示されている。これを駆け足で見るのはすこし惜しいような気がしたが仕方がない。おそらく、Wichita の部族のものであろう、インディアンの文化遺産が沢山展示されていた。いずれも、「Lewis と Clark の探検」の本のなかで紹介されていたようなもので、これまで、ほんの中でしか見ることはできなかったものを、現実目の当たりにすることができて、ますます、インディアンの生活、習慣に興味を抱いた次第である。

Lincoln ----→ Beatrice ----→ Junction City -----→ Wichita ----→

Oklahoma City ----→ Lawton

この日の走行距離 523 マイルでした。

テキサスドライブ 2日目

いよいよテキサス入り

この日の工程は、オクラホマの Lawton という町から、San Antonio の近くにある Kerrville という町まで。予定では、390 マイルの工程である。ただ、この旅のひとつの呼び物になるかもしれない、Enchanted Rock という、オーストラリアのエアーズロックについて大きいという岩山を見る予定にしている。場所が大きなドライブコースから外れていることもあり、また、実際にどんなものかも想像がつかないので、時間があれば寄りたいという程度ではあったが、密かに、アメリカの自然の大きさがまたここでも見られるのではとの期待もあり、できるだけ朝、早く出発することにした。



いよいよ、テキサスだ。

Lawton のモーテルは、インターステーツ 44 のすぐ脇であったので、方角を間違えることもなし、夜がようやく白けるころ、一路、南のテキサスを目指す。

やがて、アメリカでは滅多にないが、このオクラホマの高速ややたら有料の高速となっているが、その 44 号線に乗る。ただ、料金は、1.25 ドルと、料金所で働く人の給与も取れないくらいの金額。この有料道路の意味が知りたいと思うほどだ。高速道路の両側には、これまた、延々と広大な平原が続いている。地平線が見えるが、その地平線のところまで言っても、そのからまた、その先の地平線まで平原が開けているという感じ。日本の高速と違うのは、山がない、壁がない、そして、景色をさえぎるものが何もない、という表現がぴったりといいたい。そんな景色を楽しみながら、無事、オクラホマからテキサスに抜ける。州境は、Red River と呼ばれている川である。なぜ、この川が Red River なのかは、しばらくテキサスを走れば、すぐにその言われがわかる。とにかく、オクラホマからテキサスにはいると、途端の周りの景色の色が変わる。土がとにかく、赤いのである。だから、そこを流れている川の水も赤みが掛っているような気がする。実際に、赤いのかも知れないが、それがどうしてなのか未だ定かではない。ただ、この赤土の元はなんとなく、酸化鉄のような気がする。このあたりの土には、酸化鉄がたくさん空くまれているのではないかと、勝手な想像をしている。ニューメキシコでもそうであったし、また、サウスダコタでも同じような光景を目にしたことがある。アメリカでは、こんな光景はあちこちで見ら

れるようだ。もともとは同じ地層の形成の歴史を持っているのだろうが、それが、現代のような形で分布しているというのはどういうことなのか専門家に是非聞いてみたいような気がする。

テキサスに入ると、すぐに **Wichita Fall** という町になる。この町、オクラホマにも **Wichita** という町、この方がずっと大きなまちであるが、二つの州に渡って同じような名前があるのは、われわれにはとても不思議なきがする。が、もともとは、インディアンたちが、このあたりに住んでいて、かれらは、**Wichita** 語族と呼ばれていたらしい。すこし西のほうにいくと、**Wichita** 山脈というのものもあるから、このあたりでは一般的なものであるかもしれない。そんな好奇心が講じて、是非、**Wichita** ということばの意味を知りたいと思った次第。この **Wichita** では、ビジターセンターにより情報を入手するつもりでいたが、朝、早立ち



Saymoutk の court house.

したことと、日曜ということもありクローズドだった。なのに、テキサスのパトカーはしっかり仕事をしていて、朝一番の交通違反の車を捕まえていた。会社の同僚で、元テキサスの住人だった人から、テキサスの交通規則は厳しく、また、警察も容赦がないから注意をするようにといわれてきたが、こんなに早く、そのてきびしさを目にするとは、とふと、見れば、なんと犠牲者は若いお嬢さんさんだった。うなだれていたところをみるとかなりのスピー

ド違反ではなかったかと思う。他人事ながら、こんな情景を見て、運転は十分慎重に、慎重にという具合。その後は、何度か、パトカーが取り締まっているところを目の当たりにした。そんな経験をした **Wichita Fall** であった。この町からコースは南西に向かう。とにかく、テキサスを味わうためにはできるだけ西のコースをたどりたいということで今回のコースを決めたわけだ。ということで、82 号線を南西に、**Munday** という町まで進む。このあたりなぜか道路工事がやたらと多い。走っている車は、私のほかには、前後数キロ先まで、一台か、二台くらいしかない。対向斜線だったまに車とすれ違う程度。十分に対面二車線の道路で十分というわけなのだが、それを、



Munday の court house.

さらに二車線作っている。とにかく土地はあるのだから、土地の買収問題、地元住民対策、公害問題などなど、狭い国土の中に国民がひしめき合っているどこかの国と大きな違いだ。なんとなく、建設会社のために工事をやっているような気がする。千葉県の道路工事の建設に苦戦している息子に是非見せてあげたいような光景である。

Munday からは、これまた、立派な高速を、今度は、南に下る。天気予報によれば、この日、南の San Antonio あたりは大雨とのこと。ただ、このあたりを走っていて、行く手の西のほうを見れば、青空もちらほら見えている。西のほうの天気はそれほど崩れていないようだ。そんなことに気を使いながらはしっていると、テキサスあたりは暖かいせいか、一面が緑になっている農場なども目につく。と、そのとなりになんと、かれた茎に白い綿雪をつけたようなものが延々と広がっているではないか。そうだ。これが、なんと綿畑だったのだ。背丈は、大人の腰くらいかもしれないが。その茎の上に白い綿がいっぱいついている。想像はしていたものの、こんな綿畑を実際に見てみると、この綿を刈り取るためには、膨大な労力が必要だったのは容易に想像がつく。そのために、この国には、奴隷が必要だったということも、悲しいかな、現実の問題だったのであろう。

やがて、Ansan という町に着く。小さな町ではあるが、これがまた、アメリカのどこの町にいても驚く、例の立派なコートハウスがあるではないか。その周りをメインの街道が、ちょうどここを中心にして放射線状に走っている感じだ。ここには、83 号線、277 号線、それに、180 号線の三本の幹線が交差しており、いかにこの町が交通の要衝であるかということが分る。町は小さくても、歴史のあるまちであることを忍ばせてくれる。その Ansan の町より、すこし南に、Albilene という町があるが、ここには、インターステーツの 20 号線が走っている。この町は、非常に大きな町で、高速は、町を迂回するような形で環状線のように走り、ビジネス街を迂回している。この環状線のつくりがわれわれには非常にややこしい。町を通り抜けるには、大きく迂回していかなければならないのだが、高速道路の行き先表示がなかなか出てこず、出口の案内ばかり。たまにでてくると、今度は行く先の町の名前を書いて



いよいよテキサスの匂いがして来ました。
てあり、何号線か良く分らないのだ。

こちらは、どこの町が主要な町であるかなどわからないから、ただ、ただ、番号を頼りに走っているのだから、誠に心もとない状況。それでも、アメリカの高速は、間違えても、すぐに元に戻れるとたかをくくり、また、何度降りたり、乗ったりしてもただだから、時

間の浪費は惜しい気もするが、腹を据えて、同にでもなれという感じで走っていればなんとかなるものだ。田舎もので、よそ者には分りにくい、大都市の高速道路ではあるが、これもなんとか切り抜け、いよいよ、南に下る。すると、周りの景色にちょっとした変化が見えた。牧場の柵のしたあたりに緑の大きな塊がある。それは、なんと、是非、是非、見たいと思っていた、野生のサボテンではないか。その量が、南に向かうに従い、段々まして来る。おーっ。いよいよ、ここまで来たか。これがテキサスだ。テキサスにはサボテンが良く似合う。しかし、これだけたくさんのサボテン。ついつい、こんなに集まり、みんなサボっているよ、と駄洒落が飛び出す。敵もさすがだ。ここはテキサス。といった調子での一人旅。

そんな光景を楽しみながら、いよいよテキサスの本領発揮。このまま、南に下るつもりであったが、さあ、いってみなければ分らない、「Enchanted Rock」が待っている。「魅了する岩」という意味らしい。テキサスの州立公園にもなっているというから、これは、是非



ステーツパークになっている **Enchanted Rock**。

「Enchanted Rock」だということが一目でわかる。すばらしい光景だ。雨だから、諦めて、近道をしようかと思ったが、これは、少々の雨くらいでその価値が下がるものではない。なんと、眼前に巨大な岩山がこんもりと盛り上がっている。ちょうど、奈良の山焼きをする若草山が全部岩という感じがぴったりだ。胸をわくわくさせながら、その驚きを人に伝えたくて、ちょうど、曾木に来ていた三人連れに、「すばらしい」と声をかけた。すると、そのなかの一人のご夫

非見たいということで、このために、朝早くモーテルを出たのだ。と意気込んだが、こっぴ奈のころになると、空模様が怪しくなってきた。Llunoと言う町にくる。この町もなかなか立派なコートハウスがあったが、ちょうど化粧直しをしている最中であつた。そのまちから、20 マイルあまりいったところに、その巨大な自然の造詣物はあつた。標識を頼りに山道にはいり、しばらく行くと、行く手に大きな丸い岩肌の山が見える。遠くからもこれが、例の



巨大な **Enchanted Rock**。

人が、「ほら、見てごらん。あそこに歩いて上っている人たちがいるよ。」という。目を凝らせば、なるほど、その岩山に数人の人が、上っているではないか。なるほど、この岩山に上れば、どれほどの征服感を味わえることか。そんなことを思っていたら、その方の連れのあたりが小雨降る中を、すたすたとその岩山めがけて歩きだしたのではないか。どうも、この岩山に上るつもりらしい。きけば、その二人、ニューヨークから来た兄妹とのこと。それを案内していたおばあさんは、オースチンから来たのだという。親しくなったところで、写真のシャッターを押してもらった。すると「ありがとう、ですね。」と日本語ってきた。「おーっ。日本語だ。」と、こちらも、大して上手手もない英語で、あれこれ喋る。何でも、日本には観光で行ったことがあるという。それにしても日本語が飛び出すとはなかなかのものだ。これだから、年配の方の見識は、隅に置けないということだ。



Fredericksburg で見た教会。

雨でもここまで来た甲斐があったと、巨大な岩山を堪能し、さあ、いよいよ帰ろうかと思っていたら、雨がほとんど止んでいるような天気になっていた。これなら、明日は良い天気になると、ここで、また、気が急に晴れてきた。そして、たどりついたのは、**Fredericksburg** という町。その名前からして、当然、ドイツ系の移民の町と思う。がここがまた、すばらしく上品な町。町の通りは広く、そして、その町の中心には、大きな教会が、あちこちに立っている。

その立派なこと。これを見て、一度町をあとにしたのだが、あまりにも歴史を感じさせてくれる町の雰囲気であったので、思わず車を

引き返し、いま一度インストリートを走りぬけた。すると、その町の中心に、ひときわ目立つ大きな建物が建っていた。近づいてよくよくみれば、「Pacific War Museum」とある。なんと、なんと。この町にどうして、太平洋戦争の博物館があるのかという思い。町はドイツ系なら、同じ戦争の当事者。第二次大戦の博物館とすべきところでは



Pacific War Museum。

ないか。と、怪訝に思ったが、時間が足りず、このなぞは、後回しということになった。

この日の宿は **Kerrville**。この町も、同じフランス系の名前だ。ただし、**Burg** ではなく、**Ville** だから、一段、格はしたというところが。が、なかなか歴史のあるような町だ。



夕暮れの **Kerrville** の街。

Lawton ----> Wichita Fall ---> Saymout ---> Munday --->

Abeline -----> Sananne ---> Brady -----> Lluno ---->

Brucksburg ---> Kerrville

この日の、走行距離。

445 マイルでした。

Texasドライブ 3日目

(12. 25. 2006)

Kerrville から San Antonio まで

天気予報では今日から青空が見えるという。まだ、夜が明けていないのではっきり、良い天気になるという自信はなかったが、Lost Maple Forrest というステーツの森を走り抜けることにした。Kerrville を抜け、西に向かい、山道に入ると途端に周りにはたくさんのロッジが目立つ。それも、単なる山小屋というよりほとんどがホテル並みの立派さ。ひとつの村程度のものであれば、びっくりしないがこれが、延々と続いているのである。Kerrville には、ダムがあり、ここに大きな湖ができている。そのため、ここではウォータースポーツがとても盛んだという。加えて、立派な乗馬のトレイル、トレッキングコースと整っているのも、リゾート地としてかなり有名のようだ。



Kerrville は森と湖に囲まれた、静かなリゾート地だ

Flood Gauge というのがある。これは、アメリカの道路は、とにかく道路のアップダウンは気にせず、とにかく自然のままに造るというのが前提にあるようだ。そんなわけで、



左に見えるのが Flood Gauge

この道路が冠水すること。

この道路が冠水すること。ここに、水の増水した程度を知らせる柱が立っている。さしずめ、日本では雪国に見られる、降雪の積雪量を表示するものと同じものだと思えばよい。

山道でもクリークがあると川面ぎりぎりのところに橋をかける。それが、大雨が降ったり、上流で水が溜まったりすると、これが冠水するというわけ。こちらの洪水はやっぱり桁が違う。山のなかのクリークとは言え、その一体に突然湖ができるくらいの推量だ。そんな中でも生活をしている人がいる。その人たちは、この冠水している橋を渡らなければならない。そこを乗り越えるためには、水がどれくらいの深さであるかを知らなければ危険というわけで、

ここに、水の増水した程度を知らせる柱が立っている。

山並みを、時速七十マイルで走る。とにかく、前後に車がないから、少々センターラインをオーバーしようが、写真をとるために速度を落としてもなんの危険もない。好き放

題のドライブだ。ふとハイウェイの横をみれば、なんとなんとサボテンの群生である。テキサスはやはりこうでなくてははいけない。広いテキサスも、このあたりの **Hill country** と呼ばれるあたりから西は、いまだに荒地になっているようだ。この山道をおよそ二時間走ったが、その間に、前後には車はなし。すれ違った車はたったの一台というほど。広いテキサスでは、人口は多いとはいえ、殆どは街の周辺に集中していて、田舎になるとネブラスカに劣らず閑散としているということ。



この山並みハイウェイ。制限速度 70 マイル

やがて、山を下り、**Bandere** という街に着く。ここには、**Frontier Museum** というのがあるという。時間にゆとりはないが、開いていれば立ち寄ろうと思い、必死で探す。予めインターネットで場所を調べてあったものの、実際に行ってみると、田舎町なので標識が少なく、なかなか見つけにくい。それでも何とか辿りついたら、開館まであと 30 分もある。ここでの、この待ち時間は惜しい。結局、建物の前に建っている見事なトーテムポールを写真にとり、この地に來た証とした。



ちょっとすまして。

層ビルが立ち並ぶテキサスの都会に到着。が、自分が北西から街に入っていったのは分っているが、目的の「アラモの砦」がどこにあるのかわからない。ガイドブックを見て頭の中に描いていた地図では、近くに高級ホテルが沢山あったはずである。というわけで、ホテルを目当てにダウントウンに入る。が、これがまた、一方通行ばかりである。うっかり、ここを逆走しようものなら、たちまちパトカーにご厄介ということになる。駐車禁止の標識に注意しながら、車を止めては、眼鏡をはずし、

ここから **San Antonio** までは、すぐだ。16 号線を走り、やがて、高



見事なトーテムポール。

細かい字の地図を読む。情けないかな、老眼はこういうときに困る。それでも、やっとのことで自分の走っている通りと方角がわかり、「アラモの砦」の前まで来た。問題は、車の駐車。ホテルには駐車場はあるが、ここに止めるわけには行かない。結局、砦のすぐ近くにあったパーキングに入る。このパーキング、街中の一角にあるが、どこからでも入れるようになっている。そして、看板には、自分で料金を先払いしろと書いてある。特に人が管理しているというのではない。どうやって止めるのか分からず、**San Antonio の町並み。**



困っていたら、近くでゴミ収集をしてい

たおにちゃんが、「料金箱があそこにあるから、自分の車が駐車している場所の番号の料金箱に金を入れればいい。」と教えてくれた。なるほど、それで了解。一日、駐車して8ドルとある。このときのためにドル紙幣を持っていたが、この紙幣を投入するのに一苦労。とにかく、入れたお金が取られないように、紙幣は細く何回も折りたたんだものを押し込むような形になっている。というわけで、次々にドル紙幣をいれるわけだが、最後の紙幣はなかなか押し込むのが難しい。ところが、それがよくできていて、この料金箱の横に、押し込みようの金具がちゃんと用意されているのだ。これを使えばうまくいくと、自分の前で実演してくれた人がいて、これで無事、車を止めることができた。こうしておけば、心置きなくゆっくりと **San Antonio** の街を散策できるというわけである。

アラモ満喫 四時間半

道に迷いながらもなんとか到着し、無人の料金所にもしっかりと駐車料金を払い、早速、「アラモの砦」に行く。と、流石に人気がある。たくさんの人が砦の壁のところに集まり写真を撮っている。今は、修道院になっているそうだが、ここに、少数のアメリカ人が立てこもり、メキシコ軍の猛烈な襲撃を受けて、玉砕したわけである。その勇気ある戦いに、現代のアメリカ人は、感動するわけである。デビー・クロケットは、この独立運動が負ける戦であ



これが「アラモの砦」だ。

るとしりながら、テネシーからわざわざこの地に来ていて、この独立軍に加わり、死んで



「アラモの砦」の前でご満悦の一枚。

いったのである。テキサスがアメリカに加わったのは、1845 年とのことである。まだ、それから、200 年も経っていないというわけだ。なかが博物館になっていて、当時のこと、メキシコからの独立の戦いのことなど、伺い知ることができるとのことであったが、残念ながら、この日はクローズド。いかにも残念とばかり、鉄の扉の格子の間からカメラを中にいれて、写真を撮っていたら、係りのガードのポリスは、「また、明日来ればよいさ。」という。

確かに。でも、「私は旅の途中で、時間の余裕はないのだ。」と説明したら、わかったかどうか、分からないが、ニコニコ笑っていた。無数の弾痕の跡が残っているというが、あまりのその数の多さが、もはや、どれが弾痕の跡が分からないような状態。こうして、念願の「アラモの砦」との対面が無事終了。この「砦」をみていて気の着いたことは、耳にハイってくる言葉が、なんとスペイン語が多いこと。もう、ここは、スペイン語が公用語になっているのではと思うくらいである。そして、観光客のなかには、日本人は殆どいなかったが、それに比べ、どこに行っても必ず中国人がいるのには驚いた。あとは、街中見物ということになった。

お目当ては「アラモの砦」のほかに、もう一つ、水上ツアーがある。ここ San Antonio には街中に運河がある。これをうまく利用して、街づくりをしている。丁度、イタリアのベニスの一隅がここにあると思えばよい。この San Antonio 名物のボートに乗って見学する



名物のボートツアー。 こんなところも案内してくれる。リバーセンター

ことにした。この運河の両岸には、数多くのレストラン、カフェー、みやげ物屋が、色とりどりのデコレーションをし、小さな滝や、いかにも南国を思わせるような花の咲き乱れた花壇、そして、緑溢れる木々のアーケードを抜けるとホテルのロビーに出られるように散歩道がある。ボートツアーは、ホテルなどに泊まる人は貸切のものもあるようだが、それよりも土地の人たちとの乗り合いのほうがいろいろなハプニングがあって楽しい。ボートで案内してくれたのは、ここでは自分がベストだというガイド。スペイン語風のしゃべり方なので口調も軽やか。分からないながらも、断片的な英語でも十分の話の楽しさ



が伝わってくる。

此方が真剣に話しを聞いていると、ガイドが夢中になり、橋げたにごつんと二度ほど

やる。これも演技のうちか。大人も子供もこれには大笑い。この乗り合いの説明つきのものはユーモアたっぷり、解説も樹木の年齢まで説明するほど事細かなもの。ホテルの歴史や、名物建物のいわれ、そして、この町の楽しみ方などについても説明があった。じっくり楽しむことができるのは、こんなツアーだ。

観光地とは言え、何でも特別価格のつく日本と違い、此方は、ほとんど普通の町での料金と変わらない。そんな風潮のためか、リバーサイドのレストランも普段は人で一杯のようだ。只、この日はクリスマスの日ということで、リバーサイドのレストランはほとんどが休み。そんな中、数少ないレストランに人が集中していたが、ここでのガイドの説明では、「この店は、世界中の料理を楽しむことができる。アメリカン、イタリアン、フランス風、中国風、そして、メキシカン、メキシカン、メキシカン、メキシカン」と。メキシカンを何度も繰り返し、メキシカンが一番だとばかりの説明。これには、思わず、みんな大笑い。



リバーサイドを散策している人、橋の上の人、みんながカメラを構えているボートの上の人に愉快の手を振ってくれる。が、なぜか、耳に飛び込んでくる言葉は圧倒的にスペイン語が多い。そうなのだ、ここは、アメリカとは言え、ス

アメリカで二番目に高いという
タワー・オブ・アメリカス

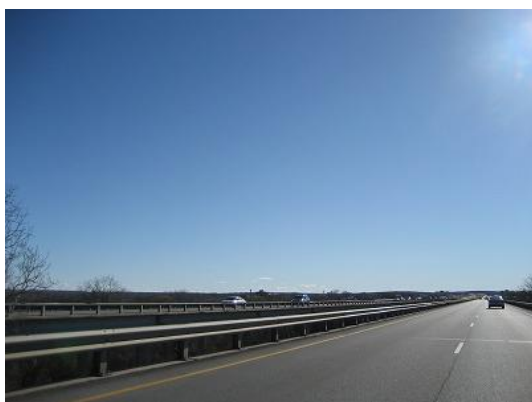
ペインであった時代もあるのだ。それに、もう直ぐそこがメキシコというより、テキサス自身がアメリカのなかの独立国みたいなものなのだということがよくわかる。



近くにこんな立派な建物が。

ラスベガスにあるものについて、アメリカでは二番目というタワーに行った。ボートから降りて見あげたら、直ぐ近くに見えたので歩いていくことにしたが、これがとんだ検討違い。近道と思って歩き始めたルート途中にあるコンベンションセンター、ここを突き抜ければ、直ぐに着くはずが、ここが工事中で通れない。工事現場を大回りすることになった。そして、腹が収まらなかったのは、こんなに苦労してや

ってきたのに、この日、やはりここもクリスマスで休み。残念、無念。私は、単純細胞だから、高いところが好きなのだ。高所恐怖症の気はあるが、このアメリカの大地の広大さを肌で感ずることのできるタワーはやはり上る価値がある。



テキサスの高速道路。勿論、無料。

じっくり、たっぷりの **San Antonio** の町も、どうやら方角が分かりかけてきた時には、もう、おさらばの時間。今日の止まりは、ここからさらに南に下り、メキシコ湾に望む **Corpus Christi**（聖体という意味なのだそう）。インターステーツにのり、一気に飛ばす。しかしそれにしても、此方は車の量が違う。それに、運転が荒っぽい。片側四車線もある高速道路で、いきなり、一番左の車線から、車の間

隙を縫って、一番右の車線に入り、そのまま、高速を降りるなんていう輩が引切り無しに私を追い越して行く。私の速度は、70マイルであるのに、である。

テキサスの高速を走っていて感心したのは、ここでは、インターステーツと平行に、というより、インターステーツの高速道路のしたに、まったく同じようにカントリーロードが走っていて、ここから自由に乗り降りできる。しかも、高速を降りる出口を間違えたときには、このカントリーロードには、引き返し専用の路線がある。次の交差点の一番左の車線は、U-ターン専用となっていて、次の車線が左折用、そして、直進用が二車線あるのだ。なるほど、



テキサスは石油の精製基地。

よく考えている。だから、行過ぎても、難なくまた逆戻りできるのだ。これだけ、感心したというのは、私も行きすぎの経験をしたという証拠。そんなことをしていたので、夕暮れ近く、此方での見知らぬ土地でのホテル探しは大変と、早めのドライブであったが、**Corpus Christi** に着いた頃は、既に夕闇が迫っていた。それでも、難なくホテルを見つけることができたのは、ラッキー。ところが驚いたことに、そのホテルにパトカーが3台も来て、なにやら取り込みをしている。テキサスは、メキシコからの違法移民が多く、そのため、犯罪も多いということで、ここは、何があったのか聞きたいのは山々ではあったが、「さわらぬ神に、祟り無し」と決め込んだ。

念願の「アラモの砦」を見学し、ボートツアーを楽しんで、大満足の日でした。



そして、Corpus Christi の夕暮れ。

Kerrville -----> Lost Maple Forest -----> Bandere -----> San Antonio
-
-----> Corpus Christi

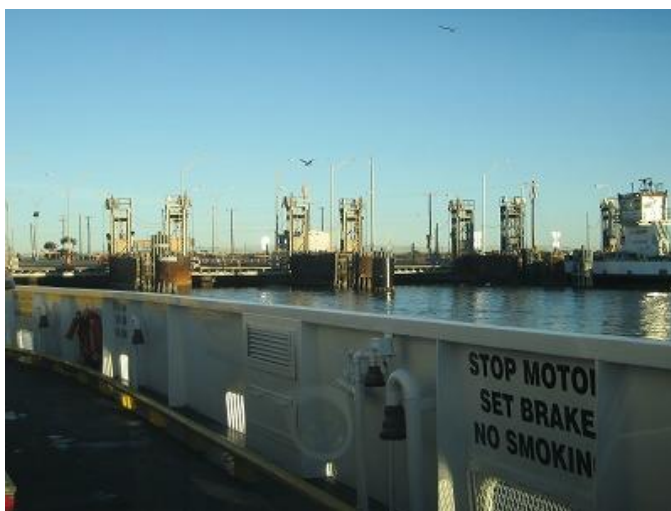
この日の走行距離は、378mile でした。

Texasドライブ 4日目

(12.26.2006)

Corpus Christi から Houston に入る。

北緯 27.5。日本で言えば、鹿児島先の、徳之島辺りである。メキシコとの国境までほぼ 100 マイルのところにある町である。こり Corpus Christi あたりのガルフコーストは、すでに、メキシコ湾が湾曲し、海岸は南北にはしっている感じである。ということは、正真正銘、朝日は海からあがってくるのである。そんな期待を込めて、ここに泊まったが、結局、朝日は、ホテルをでて高速に乗った途端に地平線に顔を出してしまった。ところが、これからがたいへん。道路は東に真っ直ぐ海岸線まで伸びている。つまり、道路の先に太陽が顔を出しているのである。あまりに太陽が目に入り、サングラスなど役に立たない状態で、ただ、目を細めて、道路の端を見ながらの走行となる。後ろにトラックがべったりついてきているのだが、こちらがゆっくり走っても追い抜こうとしない。先に行ってくれればと思うのだが、トラックとて状況は同じ、他人の車の後ろの方がよっぽど安全なのである。路肩に止まってやり過ごそうとしたが、うっかり、こんなところで停止すれば、それこそ、後ろも、太陽でブレーキランプが見えない状態だから、追突される危険がある。こんな状態で、地平線から昇ってくる太陽に悩まされながら、何とか、こんどは北に向かう、361 号線に入る。この道路は、海に出来た砂洲の上を走っている高速だ。朝、早いこともあり、対向車線には僅かに車が走ってくるものの、自分の車線には、前にも、後ろにも車が来ない。まさに人里はなれた海岸線の道路という感じ。この先は、砂洲からまた、陸に戻ることにになっているが、地図をみるとここはフェリーだと書いてある。前に、ミシシッピー川を横切るルイジアナの 1 号線で突然道路がなくなり、そこにフェリーが待っていて、これに乗り、川を越えたことがあるが、このフェリーはどんな仕組みになっているのだろうか。24



時間運行と書いてある。

初めての経験には、年齢には関係なく、幾つになってもドキドキするもの。そこにまた、新しい発見があるから、心が高まる。こうした経験をするのも若返りの秘訣なのかもしれない。ただ、その場に臨んだときにはそんなことを考えている余裕など全くないのだが……。途中、フェリーに乗る車は此方という看板を頼りに、何とかフェリーの乗り場まで来ると、すでに、フェリーには車が沢山載っていて、私の車が載ると直ぐに出発ということになった。何のこともなく、フェリーに乗る。このフェリーの距離はたいしたものではなく、殆ど 5 分程度で対岸に着いた。その間、エンジンを止め、車の窓を開けて、しばし、潮風の香に浸る。やっぱり、海の匂いはいい。

フェリーから降りると暫くは島になったところや、湾に掛けられた立派な橋を渡りながらのドライブとなった。この辺り、ちょっとした町は、どこもリゾートタウンになっていて、どこを走っても贅沢としかいいようない白いヨットが停泊しているヨットハーバーや、観光施設が立ち並んでいる。

そんな海岸沿いのドライブであるが、ここでもう一つ目立つのは、石油の精製プラント。テキサスは石油の産地でもあり、また、数多くの化学プラントの基地でもある。海岸をふと見ると無数のスタックが見える。カントリーハイウェイのすぐ近くに見事な精製プラントがあるので、野次馬根性を出して、このプラントの周りをぐるりと回るつもり



で、わき道を入る。おっ。なんと、どこのプラントかと思ったら、フィリップスのものではないか。まさか、こんなところで、フィリップスのプラントにお目にかかるなんて、まるで夢のようだ。というのも、私の元の勤務先である住友化学の石油化学工業のアメリカ戦略のパートナーがフィリップスなのである。おそらく、石油樹脂の技術者で私の知っている人も何人か、ここまで来ているのか

も知れない。場所ははっきりしないが、おそらく Port Lavaca 辺りだったかも知れない。もっとも、この辺り、何も無いところで、私のように気

まぐれ、風任せの旅の途中でこういうところで出くわすのはいいかもしれないが、これが仕事で、毎日、回りには広大な畑と、砂地に育った雑草に囲まれたようなところで生活をするとなると考えものである。なにしろ、カテリナで一躍有名になったが、ここは、日本の宮崎のように台風銀座なのである。

35 号線をひたすら走り続けたが、この道路は、海岸沿いとはいえ、海辺からはかなり入ったところを走っている。やがて、道路は、Houston に入る 288 号線へとつながる。この道路はもう、都会の中のハイウェイという感じ。ネブラスカの田舎の高速道路とは違い、車の量が圧倒的に多い。立派な中央分離帯がある。しかし、ハイウェイとは言え、カントリーロードであるため、道路は普通の生活道路と交差している。しかも、殆どは信号なしの状態である。見通しはいいし、また、横から入り込むほうが注意をするので、特に事故になるようなことはないようであるが、夜、こんな状態のところを 70 マイルも 80 マイルも出して走るのは、恐いような気がする。そんな余分なことを考えて走っていたら、なんと、反対車線の脇を、白馬が逆行して走っているではないか。この馬、何に興奮したのか、とにかく、全力疾走で道路わきを走っているのである。以前、高速道路を逆行した競馬馬の話聞いたことがあるが、結構、馬の中にも無鉄砲な奴もいるもんだと感心した次第。

こうして、Houston の街に到着したのだが、これが、また、Houston に着いたと思ってからがまだまだ長い。車の量も断然多くなってきたし、信号の数も、いよいよ町中という感じであったが、流石、大都会は違う。高層ビルがかなり近くに見えるようになって、なかなか都心に近づかないのである。

ここでうっかり高速を降りる場所を間違える。確かにガイドブックにはここで降りるはずだが、と思ったが、どうも周りの様子がおかしい、公園の中にあるはずの博物館がないどころか、公園する近くにあるような気配ではない。そこで、めがねをはずしてよくよく見れば、公園は、まだずっと先のストリートになっている。訳の分からないような状態で、ただ、太陽の影の方角から、このストリートに行けば間違いないだろうという調子で暫く走っていると、道端の脇にあるパーキングでタクシーが休んでいる。タクシー



運転手なら道は知っているだろうと、たどたどしい英語で「自然科学博物館はどの辺りか?」と尋ねれば、この通りを真っ直ぐ行き、左に曲がり、**Harman Park** があるからそこだとい



う。いわれたとおりに行ったら、そこは、立派なゴルフ場。この街中にゴルフ場。こんなところでゴルフをするなんてどんな贅沢な奴たちかと思ったが、ここでまた道が分からなくなる。仕方なく、この贅沢三昧の 1 人にもう一度道を尋ねると以外と近いところにその **Harman** 公園というのがあった。しかし、ここまでたどり着いたものの、ここには、沢山の娯楽施設がある。博物館のほか、動物園、日本庭園、劇場、美術館などなど。こうなると一体どれが目的の博物館か分からない。大きな駐車場に沢山の子供づれが来ていた立派な建物があったので、通りすがりの人に、ここは博物館と聞いたら、いや動物園だという。博物館は、もう少し向こうだと教えてくれた。仕方なく、もう一度、外にでて車で公園

を周回。そして、何とか、別の駐車場に入れる。と、ここが一般の無料駐車場だった。近くにいた人に聞くと、ここから、博物館に歩いて行けばよいと、博物館そのものを教えてくれた。公園を横切り、かなりの距離を歩いたが、それでも、帰りに見たら、この駐車場、車が一杯で止めるところに不自由をしている車さえあった。博物館、大人気のようであった。こうして、漸くたどり着いた博物館、展示されているものは、この **Houston** 周辺で採取される鉱石や、大昔の恐竜の化石などが展示されていた。ただ、この日のお目当ては、バタフライ館。ここは、この博物館の中でも独立していた、数百種類もの蝶が所狭しと飛び回っているとガイドブックにあった。チケット売り場で、本館とバタフライ館の両方のチケットを買おうとしたら、一般展示の方は、「二時過ぎになれば、開放され、ただで入場できます。それまで、バタフライ館を見ていれば丁度いいので、バタフライ館の入場チケットだけを買ってください。」という。なんと、この親切なこと。少しも商売っ気がないし、また、ここに来てくれた人をいかにも歓迎しているかの態度で、まことに好感が持てた。こうした経験は、こと、ここだけに留まらず、アメリカの観光地ではよく経験すること。彼らが本当にお客さんを大事にしているということが肌で感じられるのは、



見知らぬところを旅する者にとってはまことに気分のよい話である。

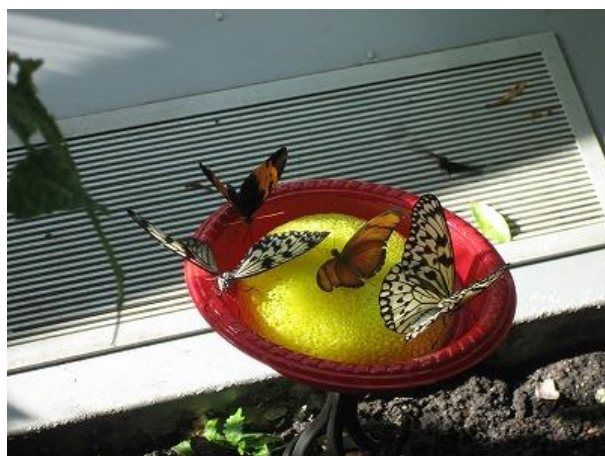


ちなみに、このバタフライ館では、実に沢山の蝶々が温室のなかを自由に飛びまわっている。しかも、この蝶々たちが非常に人懐っこいのである。カメラを構えていると、そのカメラの上に止まり、これを写真に納めようと必死に苦心している子供がいるかと思えば、指の上に止まった蝶々を10センチくらいのところで写真を取っているお嬢さんたち。自分

達を見学に来ている人間に対して、何の恐怖も感じていないように、自由に飛び回っている。アゲハ蝶のようなもの、モンシロチョウに似たもの、そして、有名なオオカバマダラのような蝶々。アメリカは国土が広く、また、気候を様々であるので、ここには、アメリカ中から集められた蝶、本当に身近に観察することができる。こうした、博物館などで実際に感心するのは、見学をしに来た人のために、ガイドの資料が無料で貸し出されていること。ここにも、蝶々の写真と名前が載った大きなシートが用意されていて、これを自由に持ち歩き、実際に飛んでいる蝶がなんという蝶であるかを確認できるようになっている。子供たちは、このシートを持ち歩き、綺麗な蝶を見つけると必死になって、その名前を調べている。この蝶を見つけたとか、これで何種類の蝶を見つけたとか、自慢げに母親に話している子供の姿など、実にほほえましい感じである。



ここでも、メキシコから、アメリカにやってきて、それから、ロッキーを越えて、東のほうに向かい、アパラチアを南に下り、フロリダ半島にでて、やがてまた、海を渡ってメキシコに帰る蝶の生態が紹介されていた。



この長い旅を数世代に渡って完結するというのだから、この昆虫に本能的に備わった習性とは、一体どのようなものなのであろうかと不思議に思わずにはいられない。この蝶にとっては、地球上の現実の南北は何の意味もなく、大昔の、まだ地軸が今の所に来る前の時代の名残が体内に残っていて、その軸に沿って同じ緯度を移動しているだけなのかもしれない

などと想像してみた。赤道を越える渡り鳥とか、太平洋を回遊している魚の本性とか、身近なところでは、生まれた川にもどってくる鮭の帰趨本能など、この地球上のあまたの動物の習性にはそのような、太古の昔の地球の姿の名残が沢山残されているような気がしてならないのだ。驚いたのは、このバタフライ館を管理している科学技術部では、この日のために孵化させるように管理された条件のもとで、蝶々を育てているということである。幼虫から、さなぎになり、そして、羽化する蝶々の生態を研究し、いつでも、蝶々の素敵な姿をいろいろな人が心置きなく楽しめるように工夫されているというわけである。ただ、金をかけて、むやみやたらに収集してくるのではなく、蝶々の生態そのものを研究しながら、こうした展示をしてゆくところにアメリカの科学に対する考え方の深さを感じた次第である。

その昔、「マディソン郡の橋」という小説がベストセラーになったことがある。イーストウッドが主役となり映画かもされたものである。その小説の主人公、キンケイドと農村の主婦との出会いのなかで、名脇役をしているのが白い蝶である。その蝶がどんなことをしたかは、一度、その本を読んでいただきたいので、ここでは触れないが、そんなことを思い出し、このバタフライ館のなかで、必死に「白い蝶」を探して回った。いました、いました。確かにそれが、その蝶であるかはわからないが、日本のモンシロチョウと同じような蝶々がアメリカにもいたのです。オオカバマダラは、アメリカの国蝶にもなっており、日本の切手にもデザインされているほどの蝶々で、実に色鮮やかなものです。蝶々がなぜこんなにも色あざやかであるかということには、必ず、生態系としての意味があるはずですが、あの美しい模様が、青虫の幼虫の中にしっかりと遺伝子として組み込まれているということに、この蝶をつくった神の力の偉大さを感じざるにはおられません。

自然博物館のあと、Houston のビジターセンターを探すつもりでダウンタウンに向かう。が、町中は非常に空いていて、何とか、そのビジターセンターがありそうな場所まで辿り

ついたのだが、さてさて、これもまた、どの建物がお目当てのものであるか、分からない。建物が分からないから、駐車しようにもなかなかとめられない。というわけで、パブリックのパーキングに車を入れ、それらしきものを探すなかなか見当たらない。よくよく調べたら、このビジターセンターは、シティーホールの中にあるということ。そのシティーホールが今日は祭日でお休みというわけだ。仕方なく、その近くにあるはずの歴史博物館を探すことにした。ところが、場所はこの辺りと間違いないのに、その建物が見当たらない。あとで気づいたのであるが、それもそのはず、この歴史博物館は、かつての由緒ある建物を公園の一角に集



めた公開しているというもの。なるほど、小さな公園ではあったが、その中のあちこちにそれは立派な館が幾つも建っている。見れば、1900年代の前半に立てられたような館が幾つもある。が、やっぱりここもこの日は閉館してあった。というわけで、諦めて、パーキングに戻ろうとしたところに、小さな看板があった。そこに、「小説の中の人形達展」と書いてある。しかも OPEN となっている。あまり時間はないが折角の機会ということで、恐る恐る入り口を除いてみると、静かな展示室に係りの女性が1人いて、入場料は要らないという。これはありがたいとの思いで、早速中に入る。ここには、アメリカの子供小説に出てくる様々な人形が、その本と一緒に展示されている。なかなか粋な趣向である。が、やっぱりこうしたものは、実際にその小説を読んだ後でなければ、その人形の意味も理解できないし、また、そのよさも伝わってこない。それにしても、アメリカ人はこうした独創的なものを本当によく考えているようである。ここは、Heritage 人形館と書かれていた。



この日の宿泊は Houston の北西の郊外にあるモーテル。まだ、少し時間があると、ふと、走り出したら、そこに、Houston の郵便局があった。折角のドライブで、思い切り南に来ているので、この一年の締めくくりにと書いた日本の友達への挨拶状をこのたびの途中で投函しようとトランクに詰め込んできている。すでに日本語で宛名は書いてあるが、これで日本に届くかどうか確認してから

発送するつもりで、どうしても郵便局の窓口に行かなくてはならない。折よく、この日は窓口も日常と同じ様にやっているようだ。そこで、日本への手紙を **Houston** から出すことにした。果たして、消印がそうってくれるかどうか分からないが、何人の人がこれに気づいてくれるか。これもまた、楽しみの一つ。

(アメリカでは、土曜、日曜でも郵便局はやっています。なんでも、土日は休んでしまう日本の公共機関に言いたい。国際的にはこれが常識だと。)



この日、走行は、

Corpus Christi ---→ Port Lavaca --→ Bay City --→

Houston

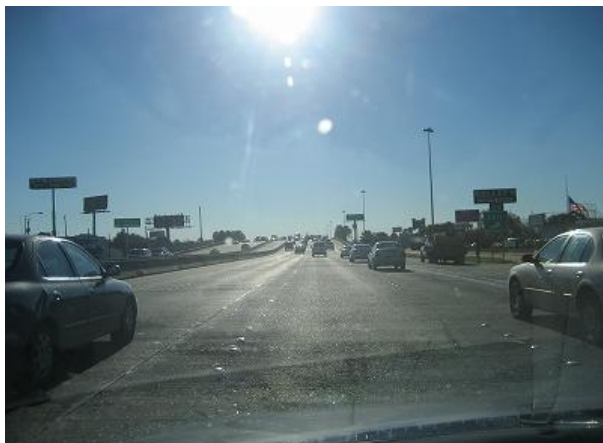
260 mile でした。

Texasドライブ 5日目

(12.27.2006)

ヒューストン・スペース・センター

実は昨日、時間的にゆとりがあれば、Houston には、アムトラックの駅があるというので、これを探したかった。夕方になり、場所もあまりはっきりしないので、諦めたが、この日、



多分、NASA にはすぐつくだろうと決めてかかり、朝の早い時間に、そのアムトラックの駅を見学に行くことにした。ところが、これが曲者。ガイドブックにはしっかりとアムトラックの駅と書いてあるが、これが、地図にも載っておらず、およその場所しか分からない。その近辺に高速道路が走っていたため、探しながらふと乗り込んだ車線がそのままハイウ

もたもたしてると、何時までも出られないゾ

エイに乗り込んでいる。仕方なく、
ハイウェイを走らされて、かなり遠

くまで行くはめになった。なんと、間違えて入った道路は昨日走って Houston に乗り込んだ高速である。こうなると意地になって、もう一度、元のダウンタウンに戻る。今度はうまく来たから思って、地図を頼りにその近辺を探すどうしても見つからない。通りの名前も確認してあるのに、あるのは古びた倉庫のような建物だけ。結局、ぐるぐる回り、1 時間を費やして探しあてることができなかった。とんだところで時間を食ってしまい、余裕でいけると思っていた NASA が、そろそろ開場の時間となってしまった。ダウンタウンからは 40 分程度とあるので、まだ、十分とおもい、高速 45 号線を飛ばす。ここも、道路が非常に整備されて片側 4 車線くらいあるが、どうも、こちらの人の運転は粗い。テキサスはとりわけスピード違反に厳しいと聞いてきたので、できるだけ制限速度を守ろうと走っているのだが、そんな車の右、左をすいすいと追い抜いて行く。それでも、この道は一本道。NASA と言えば世界的に有名な施設。近くには大きな案内がでているものとばかり思っていた、が、これが大間違い。高速の出口には、ちいさな「Space center exit next 4」とある。こちらは、この next を見落とし、「Exit 4」が NASA の出口と勘違い。そんなわけで、本来なら、Exit 25 で出なければならない高速をいい気になってすいすい走っていた。どうも、それにしては時間がかかりすぎると思いながら、それでも、もうすぐ案内板が出てくるだろう。もう一つ、もう一つと思っているうちに、Exit 8 のところで、Texas City の案内が出てきた。しまった、これは完全に間違い。Texas City といえば、今日の宿泊地

の Galveston のすぐ近くではないか。間違いに気づき、U-ターンをすることにした。先にも紹介したが、こちらの高速は、すぐその下にカントリーロードが走っていて、簡単に高速をおり、次の交差点には、必ず、U-ターンができているから、逆戻りするのは何の苦労もなくできる。

でも、朝のアムトラックの駅探しと、この、出口の看板見落としで随分と時間を食ってしまった。ところが、悪いことは次々起こるもの。気の焦りがそうさせるのかも知れない。間違えて行き過ぎたため、こんどは戻りの出口も一つ行過ぎた。一マイルほどであるが、ここからでも NASA にいけるとの案内もあったので、そのまま無理をして進んだ。ところが、高速からですぐに右折をしよ



とうとう、ここまできてしまいました。

うとおもったら、左折専用の車線に入っているではないか。仕方なく、暫くこの道を走り、こんどは、普通の交差点で U-ターン。先ほど、高速の行き過ぎで U-ターンをしてなんともなかったのだと思いきや、これが、禁止の交差点となっていたが、ここは大目に見てと強引に U-ターンをしてしまった。これ、交通違反だ。ひやひやものである。勿論、パトカーが道駆れば、切符もの。暫くはバックミラーを見ながら、あとからパトカーがついてこないかびくびくしながらの走りとなった。それでも、走っていたら、横に巨大な建物があり、よくよくみれば、「Bowling」と書いてある。なら、スペースセンターも近くには有



中は、この雑踏。さすが、人気のスポット



トラムに乗って、いざ、出発

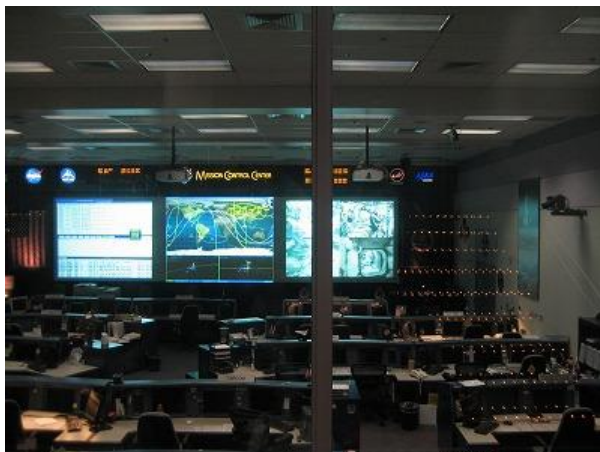
るはずだと思いこむ。が、ゆけどもゆけども、なかなかそれらしき施設が見つからず、結局、海岸べりの Bay area まで、また、行過ぎる。その先には、石油精製プラントが立ち並んでいるだけだ。道を聞くにも、こちらは道路を歩いている人がいないから、簡単に聞くわけにはいかない。そんなときにはガソリンスタンドに入るしかない。やっとのこと教えてくれた場所は、ここからかなり逆戻りをして、別の街に行くように言われた。こうして、どうにかたどり着いたが、時間は、

十一時。すでに、たくさんの人がチケット売り場に並んでいる。ここはアメリカ人の行楽施設としてもとても人気があるのだ。たまたま、モーターの観光案内の棚においてあったパンフレットに割引のクーポンがついていた。これが使えるかとカウンターできいたら、



犠牲となった宇宙飛行士たちの慰霊植樹

Starship Gallery など、どれも興味の尽きないものばかり。なかに、スペースシャトルの着陸をシミュレーションできる設備や、宇宙基地の中を探検できたりする。お目当ての管制センターに行くには、トラムツアーにのる。このスペースセンターからトラムに乗り、1時間あまりのツアーに出かけるのだ。とにかく、この宇宙センター自身、建物が 20 以上あり、しかもそれがまた、どでかいものばかり。ひとつの建物がそれぞれ独立しているので、とても歩いて回



ここが管制センター。おなじみのスクリーン

あっさりと 2 ドルほど、割引、その記録を取っていた。さあ、憧れのスペースセンターである。胸躍らせて、中に入れば、これが、すでにもう人がゴッたがえしている。子供連れの家族で一杯なのだ。

このスペースセンター、なかに、中は子供たちのためのアトラクションのほか、専門的な展示が沢山されている。Astronaut Gallery, Artifact Gallery & Exhibits,



ロケットエンジンの本体

れるような状態ではない。その建物の一つに管制センターがある。ここは、四階建てくらいが吹き抜けになった部屋に例のテレビによく出てくるディスプレイがあり、そのまえに数人ずつのグループでそれぞれがプロジェクトを遂行するようになっている。この日はすでにスペースシャトルが帰還したあとだったので、実際の運行の状況を見ることができなかったが、それでも、現在、宇宙を飛び回っている人工衛星の軌跡は映し出されているので、それだけでも、人工衛星の軌道計算に興味のある私としては、迫力十分である。しばし、NASAの職員の雰囲気に興奮したあと、ツアーは、サターンの展示場に向かう。途中、宇宙飛行士たち、一人一人の名前がついた植樹がされている。そして、その真ん中に、これまでの宇宙開発で犠牲になった飛行たちの慰霊公園を見る。おそらくここには、ハワイ出身の日



系アメリカ人宇宙飛行士、鬼塚氏も **サターンロケットの前で。さすが、でかいッ。**名前も刻まれているものと思う。ここを通り過ぎ、宇宙ロケットの展示場へ。写真では、サターンは屋外にでているものをよく見るが、現在は、一つの建て屋に入っている。これがまた、馬鹿でかい。地球の引力から脱出するための推進ロケット。そして、地球の引力圏から、月までの飛行をコントロールするもの。月着陸船を月の引力圏内まで運び、そして、月着陸船



スペースシャトルの操縦室



これが宇宙ステーションの中だ

を回収し、再び、月の引力圏を脱出し、地球に帰ってくるためのロケット。最後は、月着陸船である。月での、活動のあと、着陸船は自力で月を飛び立ち、回収船とうまくドッキングし、再び地球に戻ってくるというわけだ。これらが、全部繋がると、100メートル近くになるのではないかな。

この宇宙船のところになにやらわめいているお爺さんが居たので、記念のシャッターを押してもらったら、実はこの人、ここの説明員。宇宙船の開発に携わって人なのであろう。模型を使い、ロケットの説明と、月着陸船の回収のやり方を説明していた。実にうまくできていると思って聞いていたら、手が滑って、ドッキングのところで回収船をぽとりと落としてしまった。これには、聞いているものが、「Mistake!」といって大笑い。

このサターンのほかにも、ジェミニや、それ以前の推進ロケットが屋外に展示されていた。流石に大きい。ただ、これまで気がつかなかったが、これらのロケットの先端部には、ロケットの姿勢を制御するための小さなロケットが独立してついている。四方にロケットが噴射できるようになっていて、ここで、うまく調整してロケットの微妙な進行方向を制御できるというわけである。こうしてみると、現代の最先端技術の総帥とも言えるこの巨大ロケットも、その一つ一つの技術は、本当に基本的なものを寄せ集めたものであるということがよく分かる。



アポロ宇宙船。 本物だ一つ。

はなしは余談になるが、かつて、日本の H-II ロケットの開発をしているときに、燃料の供給状態を模擬テストするための材料を扱ったことがある。当時の原料は粉末であったので、その形状とか比重が実際の火薬と同じような流動を示す必要があり、われわれが扱っていたものが、いろいろな条件で、最も本物に近いということになり採用されていた。この噴射テストは、ロケットの一番したについている噴射口から、猛烈な勢いでガスを出すわけであるが、そのロケットの噴射設備を見るたびに当時の品質管理の難しさの苦労を思い出す。サターンロケットの噴射装置は、直径が数メートルくらいあるのではないか。これで、重さ何百トンという宇宙ロケットを地球の引力圏から飛び出させるわけである。

現在では、スペースシャトルの時代で、巨大ロケットというかつての重厚技術は影を潜めつつあるが、あの頃はわれわれが丁度、高校生から大学生といった時代。将来の、宇宙開発に憧れ、自分の青



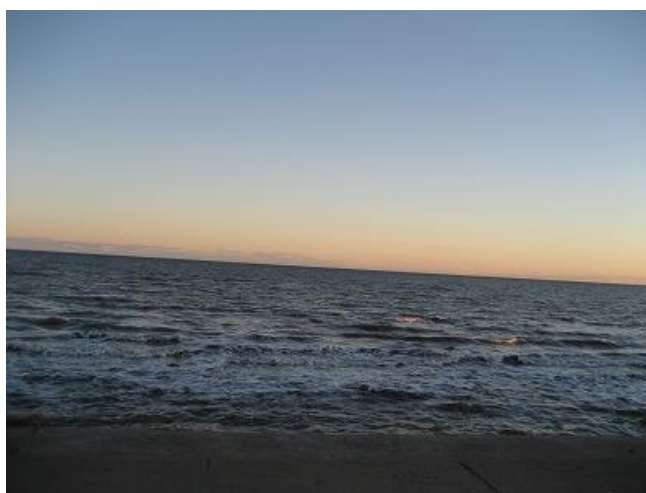
分析中の月の石。

春に夢を抱いていた頃ではなかったかと思う。今、考えても、古きよき時代ではなかったかと思う。

ここでも、感じたことは、とにかくアメリカの観光地や、名所にいくと、なんと中国人が沢山来ていること。それに比べて、日本人にお目にかかることは滅多にない。ここでも、スペースセンターの中は、見物客がごった返しているというのに、日本人はほとんどいない。たった一回、土産物売り場で日本語らしきことばを耳にする。その人、子供づれということ、こちらに駐在員でいる人か。Houston は、アメリカでも有数の都市だし、また、石油化学産業やら、そのほかのビジネスの中心地でもあるから、沢山の日本人駐在員がいるはずであるが、そうした日本人は、アメリカを観光してあるく時間的、精神的な余裕がないのであろう。日本人の働き癖がそのようにさせているのかもしれないが、まったく、島国根性が抜けないというのもどうしたものか。

そんなことを考えながら、満足のスペースセンターをあとにする。この日の宿泊地は、ここから、数10マイルもない、ガルベストンという街。とにかく、メキシコ湾の夕陽、朝日を見たくて、宿は海岸近くにとることにしたのだ。

ところが、ここでまたひと悶着。またしても、ガイドが分らず、高速に乗り損ねる。インターステーツ 45 号線を南に下るつもりが、曲がるところに、

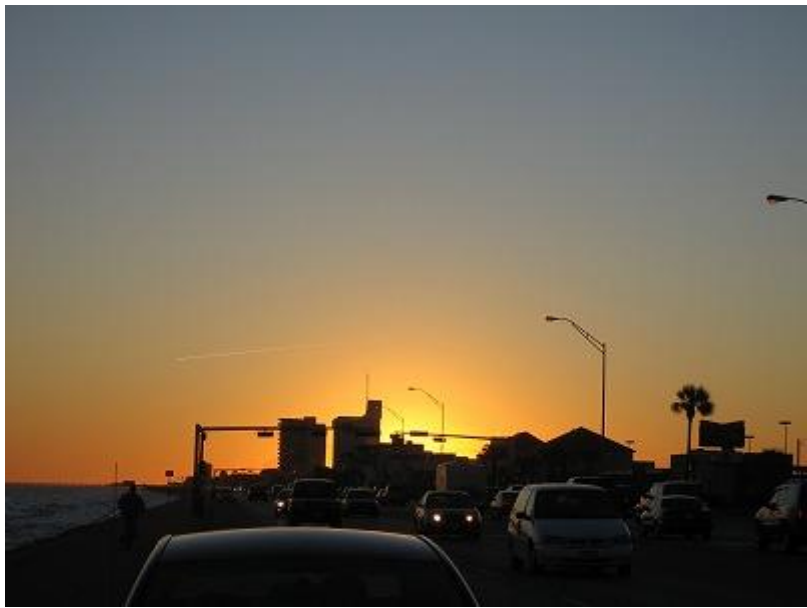


黄昏時のメキシコ湾。海の向こうは、キューバだ

制限速度 45 マイルの表示があり、これをしてっきり、ガイド板とまちがえ、おもわず、行過ぎる。気づいて、U-ターンして、無事 45 号線の入り口に来た途端、そこが工事中。車が全く停止してしまった。それでも、中に、脇の土手を乗り越えて引き返しているドライバーもいたが、多くはおとなしく待っているようなので、こちら成り行き任せということになった。どれくらい止まっていたかは分からないが、知らない土地だし、その間に、この先の予定のコースを確認したりして、この時間を有効に使うことにした。

ガルベストンという町は、その昔、この辺りの農産物である綿花の輸出港として、とても栄えたところらしい。今では、その港は Houston 港に役割を譲っているということであるが、その名残りで、町中には立派な邸宅、いまは博物館となっている様々な歴史資料館があり、それを見て回るだけでも半日はかかるという。モーテルに早めにつけば、町中を散策と行きたかったが、途中、道路工事での渋滞などあり、かなり遅くなったのモーテル着

となった。がなんと、モーターはすぐ見つかるが予約がないという。それでも、この季節、部屋は空いているのでなんとか事なきを得た。そして、楽しみにしていたメキシコ湾の夕焼けを見に浜へ。気持ちが焦っているのか、こんなことはしょっちゅうであるが、ホテル出口で一方通行を逆行してしまう。すぐにこちらに



走ってきた車が教えてく そして、Galveston の夕焼け。素人には良く撮れてる。れたので向きを変え、な

んの問題もなかったが、こちらは道路事情がよく整備されていることと、街なかでは、とにかく、一方通行が多いので、「One Way」の標識には、よほど注意をしなければならない。特に、夕方から、暗くなって標識の見えにくい時には、道路事情をよく考えて、道路に進入しないと危険である。それはともかく、浜にでると、この海岸がよくできている。片側数車線の道路が走っているが、その脇にちゃんと、縦列駐車ができるようにもう一つレーンができている。ここ、ガルベストンは今は、高級リゾート地となっているので、この海岸にドライブしてきて、夕陽、朝日を楽しむ人が沢山いるのであろう。浜に下りる人のために、しっかりとこうした駐車場があるというのが心憎い。

メキシコ湾の小波の音を暫く聞きながら、遠く、わがふるさとの沼津の千本松原に思いを馳せる。夕陽のしずむメキシコ湾の潮騒に包まれて、恋人同士が手をつないで浜辺を散歩している。 こうして、なかみたっぷりの旅の5日目は暮れた。

Houston ----→ NASA Space Center ----→ Galveston

この日のドライブ距離 92 mile でした。

Texasドライブ 6日目

(12.28.2006)

ガルベストンからテキサカーナまで。

かつての名港ガルベストンを偲ばせる由緒ある建物を朝のうちに一回り見物しようと思い、予定より1時間速く、モーテルを出た。しかし、そして、ダウンタウンに向かったのだが、何と、もうすでに東の空に太陽が昇り初めている。折角、メキシコ湾の朝日を拝もうとここまできたのだ。もう、残された時間は少ない。というわけで、昨日、夕陽を見た、海岸通りに急ぐ。車の数は少ないので、どこにでも自由に止めることができる。まことにありがたい。時間は、7時20分を指している。すでにこのときには、太陽は水平線からは離れていたが、それでも、情緒たっぷりの海にのぼってくる朝日を楽しむことができた。砂浜におり、記念にメキシコ湾の貝のかけらを二つほど拾ってきた。



これがメキシコ湾の朝日です



厳しい検査を受けたガルベストンのフェリー乗り場

直接海岸線まで行くことができなかったが、ここでは、まさしく、カリブの海の彼方に浮かぶ、キューバからや

「東雲の空、白けく頃、ガルベストンの海岸を走る。」なんと、気分のよいこと。びっくりしたのは、夕べはあまり気がつかなかったが、この日、朝日に照らされて、この海岸に立ちならぶ、ホテルの見事なこと。10階建てくらいのいかにも優雅な造りのホテルが次から次へと並んでいるのである。この街が観光地として栄えているのがよく分かる。 Corpus

Christi
では、



ってくるメキシコ湾の風をじかに肌で感ずることができ、大満足。

こうして、また、また、浮かれた気分で、この日のドライブを開始。今日の最初は、またしても、フリーフェリーに乗ること。ここ **Galveston** は、実は島になっていて、ここから内陸のほうに、大きく **Cheveston Bay** が広がっている。内海には大きな港があるので、輸送船が出入りする入り口は、対岸の **Port Bolivar** にフェリーで渡らなくてはならない。当然、車で飛ばすようには行かず、ここのフェリーは距離も長く時間がかかりかかる。勿論、通行料は無料であるが、昨今のテロ問題で、安全チェックがかなり厳しい。とりわけ乗用車は、しかも私の場合はアメリカ人ではないので、特別のレーンでチェックを受けることになった。車を所定の位置に止めると、金属探知機を持った係官が、自動車の足回りをしたから調べる。そして、トランクのなか、エンジンルームの中をチェックする。もう1人の女性の係りかんが車内を細かくひっくり返して危険なものはないか調べている。その間、車から降りて所定の位置に立っていると指示される。心配であったのは、テキサスでは酒飲み運転の取締りが非常に厳しく、車内に酒を積んでいるだけで違反とされるらしい。トランクのなか、しかも、クーラーボックスの中にビールを何本か載せていたので、何か言われるかと心配したが、これは無事だった。一方、車の車内を調べていた女性の係り官、助手席にはビデオカメラ、そして、後部の座席には、望遠レンズのついたカメラを乗せていたのを見つけ、お前は、カメラマンかと聞いてきた。「風景の写真を撮りながら、旅をしているものだ。」と答えようとしたが、相手がそう思ってくれているのなら、黙って、そうだといいほうが、面倒でなくてよいとおもい。「イエスサァー」といったら、ニコニコ機嫌よく、パスをしてくれた。これで、フェリーの乗り場に行くが、これが、たまたま、私が一番先に並ぶようになったので、車をつける位置、



軍艦と潜水艦の博物館

列などよく分からなかったが、まあ、何とかなるだろうで、沢山ある船着場のうち、一番右だと指示されたところに並ぶ。フェリーは車が一杯にならないと出ないかと思い、一番先ということはかなり待たされると覚悟したが、5分もしないうちに迎えの船がやって来た。船の両舷に三列に並べて車を載せるが、大型のトラックが真ん中になる。こんな要領で、すぐに車が一杯になり、やがて岸を離れる。フェリーの縁には、かもめやら、海鳥が人懐っこく止っている。多分、フェリーの客が、こうして船に乗っている間にいろいろな食べ物をあげるのであろう。こちらが写真を撮ろうと窓をあけたら、えさをくれるものと勘違いして、何匹も一斉にやって来た。そんな光景を初めて見る者には、鳥達のあまりの迫力があまりにもすさまじい、思わず、「ヒ

ッチコックの映画」の場面が頭のなかをよぎった。

この湾の途中には、中洲があり、そこには、軍艦が止っていた。よくよく見れば、その横に潜水艦も停泊しており、おそらくこれは海洋博物館になっているのであろう。その防波堤の先では、ノンビリ海釣りをしている人たちが見えた。ここのフェリーの所要時間は、およそ 10 分程度か。途中、すれ違いのフェリーがあり、こうしてひっきりなしに車を渡しているのである。

Port Bolivar から Crystal Beach、Caplen、Gilchrist、そして High Island までは、Bolivar 半島と呼ばれており、延々と砂浜が続いている。その距離、およそ 30mile、50 ㎞である。途中、この道路は勿論舗装された高速道路で、制限速度、65 から 70 マイルというもの。ただ、ここから 200 メートルくらいのところは海岸の砂浜になっていて、Beach Dr.となっている。海岸線を RV が自由に走れるようになっているのだ。この日をまだ、朝早くから、大きなピックアップ



砂浜が延々と続く Crystal Beach

トラックにのった髭を生やしたおじいさんが得意げに砂浜をドライブしていた。私も一走りしようと思ったが、すぐ脇に、Wrecker Service の立て看板が目に入った。つまり、この砂浜では、動けなくなって往生する車が多いということ。これは、クワバラ、クワバラと、おとなしく、また元のドライブウェイに戻ることに。

この辺りには、結構、住宅も建っている。勿論、夏の観光目当てのバンガロー、そして、



どこの家も高床式でした。

コテージなどであろう。しかし、よく見ると、こうした家がすべて、高床式になっている。高潮の時には、この辺り一体が水に浸ってしまうということだろう。でも、そんな時にはこのカントリーロードは走れるのかな、などという疑問が湧いた。

こうして、メキシコ湾の風を受けながらの楽しい南国ドライブもこれで終り。いよいよ海岸線をはなれ、これから一路、帰りのドライブとなる。早速、インターステーツの 10 号線に戻る。

懐かしいこと。この 10 号線、じつは、インディアナにいた頃、ニューオーリンズまでドラ

イブしたとき、ルイジアナのラファイエットからバトンルージュまで走ったことがある。ニューメキシコとテキサスの州境にある El Paso を出発点として、フロリダの東海岸にある Jacksonville まで伸びた、アメリカ大陸の一番南を走るインターステーツである。広いテキサスをまさしく、横断する形になっている。なんと驚いたことに、テキサスとルイジアナの境の町 Orange の出口の番号が、Exit 880 になっている。ということは、このインターステーツ、テキサスの西の端から東の端まで、880mile を走っているということになる。時速 80mile で飛ばしても、テキサスを走り抜けるのに、11 時間、つまり、半日、走りっぱなしということになる。なんと、気の遠くなるほど、テキサスの大きいことか。

やがて、テキサスからルイジアナに入る。アメリカのインターステーツでは、州の取り掛かりのレストエリアには、かならずその州のビジターセンターがあり、ここで、様々な情報を入手することができる。勿論、それまで走ってきた隣の州のものは置いてない。自



ルイジアナのビジターセンターで。

分の州の案内だけであるところが面白い。こうしたところで、いつもにこやかに迎えてくれるのは、優しいおばさんたち。ボランティアで働いている人たちである。アメリカでは、ボランティアという行動にとってもステータスがあり、こうした社会奉仕ができる人は、ある程度、経済的にも裕福な人たちだ。だから、われわれ旅行者にも極めて愛想がいい。そこがうれしい。コーヒーサービスがあったり、州の地図や、州のすべての都市の観光案内がそろえられていたり、宿泊施設と、

その割引券などがところ狭しと並んでいる。尋ねれば、その州の細かな歴史や、地域の特徴なども説明をしてくれるので、かなりの知識を持っている人たちとお見受けする。とにかく、自分達の州に来てくれたひとを心から歓迎するという態度がうれしい。

この Information Center でたまたま隣に駐車した車が、こう部座席にキャンバスを一杯積んでいた。見たら、ご年配の女性が 1 人で運転している。旅をしながら絵を描いて楽しんでいるのであろう。窓が閉まっていたので、手真似で絵描きかねと聞いたら、ニコニコしながら、そうだと応えていた。タイミングがよければ、絵を見せてもらいたかったが残念無念。それに、その女性、なかなかの美人でした。

この 10 号線も、Sulphur という街でお別れし、いよいよ北に、北に向かうことになる。テキサスとルイジアナの州境には大きな湖が延々と続いているが、なぜかこの湖の名前が地図には出ていない。Toledo Bend Res. とあるだけである。はっきりしないがどうも湿地帯の様でもある。その成果、この Sulphur から北に走るカントリーロードは、見事な森林地帯を抜ける高速道路となっている。緑溢れる林のなかを走る高速にほかの車が殆どいな

い。暫く自分だけ専用高速道路を走るという気分を味わった。こうして、北に北にすすみ、Shreveport という街に着いたのが 16 時半。大分、時間がかかった感じ。でも、この街のすぐ手前に、なんと、ここにもかというように、Mansfield という街があった。Missouri にある Mansfield は、「草原の小さな家」の小説を書いた Laura Ingalls の博物館があるということで尋ねる予定にしている街だ。

どこに行っても同じ様な名前があるということは、どこに行っても、人間の考えることは、似ているということ。ついつい、人は誰も、ルイジアナ・・・なんて駄洒落を言いながら、ドライブ。



おッ。East と South が同じ方向だ。

どっちへ行けばよいのだ。

がよく分からず、ついつい、逆にターンをしてしまう。ここで、慌てるのが人の常。パーキングに入り、向きを変えて急いで戻ろうとして入った道が一方通行。信号が赤だったので、車は居なかったが急いでもう一度右折をして、何食わぬ顔で、もう一方のストリートに入ることができた。ここでは、道を聞くに限ると、今度は Mac に入る。酒のつまみのサラダを買い込んで、ついでにモーテルの場所を聞く。ストリートの名前を聞いても分からないが、幾つ目の信号かを聞いて、何とか、大まかの場所が分かる。地図で理解していたよりもかなり遠くのような。やっぱり、知らない土地での場所探しをする時には、どこの町にもある立派なコートハウス。明るいうちにしないで、ここで、もう一度反省。

宿泊地の Texarkana という街に着いたときには、すっかり暗くなっていた。この街、不思議なことに街の真ん中をテキサスとアーカンサスの州境が走っている。71 号線というハイウェイが街の真ん中を走っていて、これが州境と地図に説明してある。こうしたことはアメリカではよくあることのようにだ。カンザスシティーもそうであるし、州境のある大きな街は、ツインシティとなっていて、州が変われば別の市の名前になったりしている。街中のストリート



この日はテキサスからルイジアナに入り、アーカンサスを走ってから、また、テキサスに戻ったことになる。モーテルについて、一日の反省をし、明日のコースを確認して、いつもより多めのビールを飲んで、アーッ、いい気分。テレビは、英語でなにやらほざいているようだが、知ったこっちゃない。この日、12月28日。今年も残すところあと僅かと成りました。

Galveston ----→ Port Bolivar -----→ High Island -----→ Stowell

----→ Beaumont -----→ Orange -----→ Sulpher ----→

De Ridder Leesville -----→ Mansfield ----→ Shreveport -----→ Texarkana

走った距離は、397mile でした。

Texasドライブ 7日目

(12.29.2006)

Texarkana から、スプリングリーフィールドまで、

この日は、少々、強行軍であるので、昨晚はじっくり睡眠。六時前に目が覚めるかと思いきや、やっぱり目が覚めたのは所定の時刻。疲れが少々溜まっている感じ。昨日は町中でちょっと迷ったので、ここのステーツロード、すなわち、州境となっているハイウェイがちゃんと見つかるかどうか心配であったので、モーテルをでるときにカウンターでコーヒーを飲んでいる宿泊客と思しき人に道を尋ねた。すると、近いけれども、ここのすぐ脇を走っているインターステーツに乗れば、二つ目の出口がそうだという。確かに、そのとおり。これで、思ったとおりのコースに乗ることができおお助かり。直ぐにアーカンサスに入った。ここは、今年の春に山並みドライブを楽しんだところで、なかなか景色のよい州である。



De Queen という大げさな名前のついた町。この De Queen から Mena まで、アーカンサスの道はアップダウンが激しい。かなり急激な下り坂があるかと思うと一揆の昇りになる。その向こうは全く見えない状態で空に飛び出すような形でこの山の背を乗り越える。偶に対抗車に出くわす。御互いに突然自分の前に車が出てくるから、かなりの度胸がいる。こういうところでは絶対に追い越しなどできない。道はカーブしていることもあるが、このように激しいアップダウンのところは、まず間違いなく、直線道路になっている。この様にアメリカの道路は、アップダウンはあっても、道はほぼ真っ直ぐに伸びていると思えば、まず間違いない。勿論、過信は禁物であるが。Missouri とカンザスの州境の近くを走っているこの 71 号線は、アメリカの北と南をつなぐ主要なハイウェイでもある。というわけで、この道路の途中にはいくつかの交通の要所がある。その一つが Fort Smith で、ここで東西にはしるインターステーツ 40 と交差している。かつては砦があり、栄えていた街であろう。ハイウェイはこの町を迂回するような形になっているが、古い街道を辿れば、ダウンタウンに入れる。



町中の様子を見ようと、この旧街道にはいり、やがて街の中心部に辿りつくことができた。が、ここまでは、すんなり来ていたものだから時間的に余裕があるとばかり思っていたのに、この旧街道を通過するのに思いのほか時間がかかった。街の中心部で偶然見つけた立派な境界で記念写真を撮ったまではよかったが、その場所で沢山の道路が交差しており、しかも、一方通行ばかり。その上、道路の標識がなかなか見つからない。街の中心部で道に迷った形になった。同じようなところをぐるぐる回っているような気がした。テキサスを走っているときには、曲がり角と、曲がってからのストリートに標識があり、自分の走っているストリートを確認することが容易にできた。他所の者にとってはとても親切だなという感じがした。それにたいして、アーカンサスは標識が少なすぎる。曲がるときの案内はあるが、曲がったあとに、この道



がどこに繋がっているのか、なかなか、確認の標識がでてこない。これは、地元の人にはなんでもないことであろうが、一回きりの通りすがりの旅のドライバーにとっても心もとないことこの上なしである。ハイウェイの標識のみならず、スピード標識にしてもおなじ。速度制限の表示がなかなか出てこない。テキサスでは、少し走れば直ぐに速度制限の標

識が目に飛び込んでくるから、安心してスピードを出すことができる。ところが、アーカンサスはめったに標識が出てこない。一体、ここの制限速度がどれくらいなのかなかなか確認できない。だから、うっかり、カントリーロードで、速度制限が 50mile のところを 60mile とおもし、5mile でもオーバーして走ると偉いことになる。



そんな、いろいろを感じながら、走っていたものだから、**Springdale** で出口を見失ってしまった。**Branson** に入るのに、**Bear Springs** を通るつもりだったが、**Rogers** まで行き、



62 号線を走ることにする。それでも、**Bear Springs** には、辿りつけるようだ。途中、**Berryville** というところで、ツーリストビューローによる。こうした公共の案内所、たいていは女性のボランティアの人なのだが、ここは、なぜか男性。やはり、すでにリタイアした人であろう。とても、気さくなひとで、これからどこに行くのかと聞く。**Branson** だというと、**Branson** では、どこに行くかと聞く。

この辺りの人は、**Branson** と聞けば、シアターに行くものだと思っているようだ。あいにく、お目当ての劇場が冬で休演中なので、街の見物だけをしに行くと応えると、ブランソンまでの道を教えてくれた。確かに、**Bear Springs** に行けば、小1時間でいけるという。でも、ここで、もらったこの地域のローカル地図を見たら、**Table Rock Lake** を越えて行けば、田舎道だが、かなりの近道になりそう。とかって思い込んで、**21** 号線を走ることにした。この道もなかなか変化にとんだ山並みハイウェイで、少々曲がりくねりは多く、スピードは出せないが、景色を見ながらの楽しいドライブをすることができた。結局、距離的にはかなり近道をしたつもりだったが、道路がそんな状態だったので時間は意外とかかっていたようだ。



にした。

Bear Springs から来ているハイウェイに乗り、**Branson** を目指す。が、近道をうまく走りぬけたと安心していったせいか、その出口を行過ぎる。慌てて地図を見て、こちらからでもいけると確認し、先ほどもらった詳しい地図を頼りにお目当ての **Branson** の劇場集落を探したが、結局見つからず、やっぱり、もとのルートに引き返すこと

こうして、無事、Shoji Tabuchi のシアターを探しだす。なかなか立派な劇場である。残念ながら、この日は、上演はされておらず、仕方なく、ここに来たという記念写真だけをとる。周りにも沢山の劇場が立ち並んでいるが、この Shoji Tabuchi の劇場は、評判となるだけあり、大きな駐車場を備えた、立派な造りのもの。アンディ・ウィリアムスや Magnificent Seven, Roy Rogers Jr, Brett Family, ロシアのコメディアン、YAKOV などなどのシアターがずらりと立ち並んでおり、アメリカ中から、何日も演劇を楽しみに来るといふから、ここはたいしたもの。是非、アメリカに在る間に演劇鑑賞を実現したいものだ。

この日、Laura の博物館のある Mansfield まで、行くつもりだったが、ここで、すでにもう四時。いけないこともないが、暗くなつての宿探しは大変なので、Mansfield は、あしたの朝、早く尋ねることにする。



それと言うのも、テキサスでは、五時半くらいまであかるかったが、流石、ここは、かなり東のほうに来ている。もう四時で薄暗い。時差があるのだ。流石、アメリカ、そんなことを実感した。7 日目の一日でした。

Texarkana ---> De Queen -----> Mena -----> Fort Smith

-----> Fayetteville -----> Rogers -----> Eureka Sprs. ----->

Berryville -----> Branson -----> Springfield

この日の走行距離は、5 1 0 mile でした。

Texasドライブ 8日目

(12.30.2006)

Springfield から Jefferson City まで

ブランソンで、余分な時間を食い、訪問を予定していたマンスフィールドに寄るとスプリングフィールドへの到着が六時ごろになる。これでは、ネブラスカより随分東のこの地域では、すでに暗くっており、ストリートの名前の確認も難しいので、ホテルを見つけるのが大変と、昨日は、早めにホテルに入り、できれば、今日の行動予定の前にマンスフィールドに行ってみようかと計画していた。この日のお目当ては、自動車に乗りながら鍾乳洞の中を見学できるというファンタスティックケイブ。いろいろ情報を調べたが、このケイブが何時からやっているか分からない。そこで、このケイブに行く前にマンスフィールドまで二時間くらいで往復しようと



考えていたのだが、たまたま、ブランソンからスプリングフィールドへの途中で立ち寄った **Information Center** で手に入れたパンフレットに八時からやっているとあった。これは、ラッキー。これなら、先にこちらを見学して、そのあとマンスフィールドにすれば、今日の工程は一時間の節約になる。というわけで、この日は、ケイブの見学を先に入れることにする。このケイブは町の郊外にあるので、ちょっと余裕を見て、市内を先に一回り、見学することにした。もし、ケイブの見学のあと、時間があれば、歴史博物館に寄りたいと思ったからだ。



この日は朝から少し、小雨模様。しかし、ケイブの中を見学するのに、外の雨は気にならない。大地が天井になっているからだ。ここのケイブ、流石に凄い。**250 千年の歴史**という。1862 年に **John Knox** という人がこの辺りに狩にきていてたまたま見つけたという。こうした鍾乳洞が **Missouri 州**だけでも **5600**もあるというから、驚き。そして、なんとこの

鍾乳洞を最初に探検したのは、スプリングフィールドに住んでいた 12 人の女性だということから、これにもびっくり。その人たちの名前が、当時のまま鍾乳洞の壁に刻まれている。1920 年台になり、この洞穴は、集会所として利用されていたらしい。アメリカでは、こうしたことがよくあるようだ。今でもこうした洞穴で、昼食会をしたり、舞踏会や団欒をして楽しんだりする習慣が残っているようだ。なかには、そこをレストランにしているところもある。そんな歴史のあるこのケイブもたいしたもの。膨大な量の地下水も流れているという。1941 年に、この地方に大きなトルネードの被害があったときに、周辺一体で生活用水に困り、その時には、このケイブの下を流れる地下水から水を汲み上げたとのこと。この水が何万年もかけて作り上げた自然の造詣の偉大さには、まことに恐れ入る。



天井からは、滴り落ちるしずくが地層に沿って一列に並んでいると、その通りに石灰石がツララとなっている。そして、その下にも、グランドに一列に、雫の落ちたところに石灰石が塔を作り上げている。大学の専門家のような兄さんが案内してくれる。そのお兄さん、一番の好きな作品だと言っていたのは、天井からのツララと、下からの塔が繋がってできた見事な柱だと言っていた。

一緒に車で回った家族が、五歳くらいの双子の感じの子供をつれていたが、この子供がまた、一人前の質問をする。こちらの子供はこうした時に何の臆面もなく質問するのが憎ら

しい。こんな子供のころから、恥ずかしさを克服して、平然と大人顔負けの自分主張、言いたいことを発言するのだから、たいしたものだ。アメリカ人の自分の考え、言いたいことをうまく纏めるところ、そして、自己主張の上手なところ、嫌というほど経験させられているが、そうしたものが、この年齢から培われているというのがよく分かる。学校ではなく、そして、子供たちの間でではなく、まさしく、親の生活態度、そのものから身につけたものだろう。家庭教育、躾の大切さを肌で感じた次第。

石灰石でできた、塔の中には、恋人が寄り添ったような感じのもの。そして、神父が聖書を読んでいるように見えるもの、あるいは、動物の怪獣のようなもの。こうしたものには、それぞれ楽しい名前がついている。こどもたちにも親しみのもてるような工夫がされているのが分かる。

この鍾乳洞を車に乗って見学している間、いつの間にか、この兄さんの仲間が記念写真を撮っていた。説明員にはチップも払わないので、思わず、十ドルで買う。そして、二度と来ることはないだろうと、幸運の石など、みやげ物を買う。



朝一番の見学者たちだったのだろう。われわれのツアーは、8人のグループであったが、この見学が終わった頃には雨も上がり、次の観光客が貸し切りバスで訪問して来ていた。ご年配の方々の一行であったが、ここのケイブであれば、見て回るのに歩く必要がないので、こうしたひとびとには随分人気があるのかもしれない。

ケイブの見学が終り、いよいよ **Laura Ingalls** の博物館に行く事にしたが、その前に少し時間があるようだったので、ここの歴史博物館を訪ねることにした。アメリカの歴史博物館は、独立以後のものは、大体が南北戦争ぐらいからの展示であるが、それ以前のものは、その地に住んでいたインディアンのものが集められている。

そうした文化遺産は、高々200年くらい前に遣われていたものなので、その保存状態が非常によい。このスプリングフィールドあたりに住んでいたインディアンは、**Missouri** 族か、**Michigawea** 族である。ケイブに行く前に、下調べをして、大体の場所がわかっていたが、はっきりとこの建物だという確信はなかった。

その下調べの時。信号が赤になり、こちらは右折だから、そのままいつものように曲がろうとした。が、なんと、横にいるのはパトカー。いくら、右折禁止の標識がないので大丈夫だと確認しても、流石に、ここで、右折するのは気が引けた。大都会であれば、標識がなくとも、右折禁止の場合がある。また、ほんの小さな標識である場合もある。ネブラスカでの運転免許の路上テストのとき、うっかりこの標識に気づかず、大失敗を経験したことがあるが、ここで、いくら交通違反ではないとは言え、パトカーのよこで、赤信号で右折するのは、度胸がしった。結局事なきを得たが、ひやひやものである。あとから、パトカーのサイレンが何時鳴るか、バックミラーを見ながら暫くは、気が気ではなかった。



その交差点にまた戻り、建物を探したが、どうもはっきりしない。街の行政の中心部で、いかめしい建物が一杯あるが、どうも正確な建物がわからず、ぐるぐるまわる。そのうち、たまたま、車を止めて調べようと思った駐車場が、図書館で、運良く、中に入れたので、ここで場所を尋ねる。カウンターのひとが、建物はあそこに見える建物だという。と、地図の番地で調べ、これが博物館ではないかと思っていた通りの建物であった。とても素晴らしい展示をしてある。是非、楽しんできてくれと言われ、これで気をよくして、車に戻り、今度こそと博物館に向かう。が、この駐車場がなかなか分らない。建物はすぐそこに見えるのだが、表どおりからの入り口がないのだ。また、その周辺をぐるぐる回り、やっとなんとか止めることができた。ところが、ところが、である。なんと、中に入ろうと



ことにした。

したら、ただいま、年末で閉鎖中。オープンは、一月二日からと書いてある。折角、図書館の兄さんがインターネットで、今日は十時半からやっていると確認してくれたのに。まあ、暮れだから仕様がなだろうと諦める。

ここで、腹いせでもないが、隣に止まっている非番のパトカーの写真を撮って、腹を収める。これで、マンスフィールドに向かう

マンスフィールドでは、「草原の小さな家」の作者、ローラ・インガルスが、この小説を執筆したという家が博物館になっていて、知る人ぞ知る、とても人気のあるところらしい。

インターネットで調べたところでは、十一月の半ばから閉館しているとのことがあるが、この時しか、ここを尋ねる機会はないと、庭だけでも見ることにした。

ゲートが閉まっており、まさしく門前払いであったが、ここに来たことだけは間違いないと、記念の写真を撮り、一人満足。この頃には雨も上がる。ケイプの見学を先にしたので、今日の予定変更もなんとか無事行きそう。ここから、インターステーツ 44 に向かう。

Lebanon というところから、高速に乗り、Cuba という町で降りて、途中、スイスという村を通り過ぎる。こんな町の名前を見ていると、ここがどこにいるのか分からなくなってしまいそうだ。



高速で、出口を確認しようとレストエリアにより、また、元の道に戻ろうとしたら、横を覆面パトカーが走っている。ふと見たら、助手席にビデオカメラがセットされていて、車体には無線のアンテナが何本も立っている。典型的な覆面パトカーの姿。流石、みんなよく知っている。スピードを落とし、その後ろを大人しく走っている。誰一人、パトカーを追い抜くような端ない真似はしない。



Cuba という街でインターステーツをおり、田舎道を走って Missouri 川の辺の Hermann という町に入る。ここに来てびっくり。なんだ、この町は。とにかく、通りに面した建物のいかめしいこと。歴史を存分に味合わせてくれる建物がずらりと並んでいる。なんでもドイツ人がここに入植して、農耕

を始めたそうだが、あまり土地が肥沃ではなく、そこで、ブドウを上、この街で醸造をはじめたとのこと。これが大当たりをして、この地域、アメリカでも有数のワインの産地として繁栄したようだ。その名残で、小さな街ではあるが、街道筋に建っている建物の歴史

を感じさせる立派な造りには恐れいる。Missouri 川の辺にあるので、Lewis と Clark もここを通ったはずである。ただ、Lewis と Clark の探検の本当の試練は、ネブラスカ辺りから始まるので、ミズーリのこの辺りのことはあまり歴史のなかでは注目されていないだけの話。

ここから、ミズーリ川に沿って、畑のなかのハイウェイを走る。周りは農場だけのまことに広々とした田舎道。時々丘を越えることもあるが、殆どは見通しの効く、一本道である。いつの間にか、前を走っていた車がわき道に消え、夕暮れが迫りつつあるなか、こ



の道をただ 1 人走る。

Jefferson の町。暗くなりかけた頃、この街に入った。遠くにイルミネーションされた高い建物がある。ホワイトハウスのような建物だ。ここがキャピタルシティーだったとは。うかつであった。そういえば、ミズーリ州の大都市、東の St. Louis も、そして、西のカンザスシティも、州都ではない。いずれも州境を流れる大きな川に沿ってできた街であるが、

アメリカでは、州の端にある町はまず州都とされることはない。ニューオーリンズにしてもメンフィスにしても、オマハにしてみてもしかりである。シカゴやデトロイトでさえそうである。州都となる資格として、州の中ほどに位置していると言うことがあるのかどうかは定かではないが、広い土地のアメリカ、どこにでも、町を作れるということか。勿論、街の名前は、第三代大統領の Jefferson から取ったことは間違いないだろう。ともかく、明日、朝、町中を見に行こう。

この日の走り。

Springfield ----→ Mansfield ----→ Lebanon ----→ Rolla

Cuba -----→ Hermann -----→ Jefferson City

以上 310mile でした。

Texasドライブ 9日目

(12.31.2006)

Jefferson City から Lincoln まで

Jefferson シティが、ミズーリ州のキャピタルシティであったのは、昨日、夕暮れ迫るここに到着して、夜の帳の中でイルミネーションされてキャピタルハウスが悠然と輝いているのを見てからである。その威容、ネブラスカのキャピタルハウスとは貫禄が違う。

朝の散策。モーテルの前の道をミズーリ川に向かって真っ直ぐ行けば、またの行政地区に入るようになっていた。そこには、アムトラックの駅もあるとのこと。これにも大きな期待をかけた。キャピタルハウスの周辺に行ってみるとは、貫禄のある建物が数限りなく



ある。銀行やら、教会やら、コートハウスなど、立派な建物がところ狭しと建っている。キャピタルハウスの前にある銅像は、Jefferson のものであろう。このまえで、記念写真を撮っていたら、パトカーが睨んでいく。キャピタルハウスのガードのボリスだった。朝一番ということで、オフィサーのためにリザーブされている駐車場に止めていたからであらう。それでも、こちらが旅行者

だということが直ぐにわかったのか、それでも、今日が年末でもあり、日曜であることからか、事なきをえた。アメリカの州には、このホワイトハウスの形をしたキャピタルハウスがいたるところにある。各州の州知事は、ここに入りやがてホワイトハウスを目指すという、その意気込みなのか、それとも、合衆国のために、国が一つであるという意識を持つために、ここにも中央政府と同じ行政がされているということを表しているのかわからないが、とにかく、このホワイトハウスをモデルにしたキャピタルハウスはいたるところで目にすることができる。



最終日、この日のドライブは天気とにらめっこの走り。テキサスを走り回っているころは、天気は上々。私が通りすぎたあとにストームが来たとのこと。だが、今回のドライブ行くところ行くところどこも天気巡られ、青空を拝みながらの最高気分。ところが最終日。どうも、天気は下り坂。ミズーリ、アイオワ、カンザス、ネブラスカと大荒れとの予想である。最後の日ぐらいは仕様がなかと覚悟していたが、其れでもジェファーソンシティーを離れ、**Osage land** に向かうころは青空がのぞいていた。これなら今日一日くらい持つかなという感じである。そこで、カンザスに入る道を少し西にとることにした。50号線より少し南の 54 号線を走り、ミズーリの山と湖のリゾート地の中を走る。ミズーリ



の典型的な風景である。ミズーリは山並みを入る道が多い。それだけ標高が高いということ。西に向かって走っていると、その高速道路のずっと向こうに大平原が開けている。ひょっとして、あれはカンザスの大草原なのではと思うくらい見通しがよい。ハイウェイは真っ直ぐではあるが、アップダウンは相変わらず。但し、田舎道ではないので、時々、切通しが出てくる。そんなところは、岩肌がむき出しになっており、行くそうもの地層が顔をのぞかせる。アメリカ大陸の歴史をそのまま標本にしたようなもの。見事な地層というほかない。専門家にしてみれば、道路建設でこうした地層のサンプルが幾らでも手に入る



ので、苦をせずに研究できるというもの。現代にして、何万年、何億年の昔の地球の状態と体面できるのであるから、羨ましい限りである。彼らにしてみれば、これほどおいしい、馳走はないところか。

Collins という街で、54 号線と別れ、13 号線に入る。奇数のハイウェイなので、南北に走っている道路だ。これを北に進めばカンザスシティーに入る。

もう、ネブラスカもかなり近くなったという気持ちが出てくる。途中、7 号線に入るところに聞いたような名前の街が出てくる。**Clinton** と言う町。オクラホマにもこの名前の街はあるが、たしか、大統領の **Clinton** は、アーカンサスではなかったかと思う。何の気なしに興味半分街、街のビジネスディストリクト・中心街を走ることにした。すると、そこに立ち並ぶ住宅のなんと立派なこと。まるで、玄関周りだけでなく、二階にもテラスがある御伽噺のなかに出てくるような贅沢な造りの家が、道路わきのちょっとした小高い丘の上に

次々に現れてくる。一体この街、どうしてこんなに裕福なのか、不思議である。

この辺りに来て、どうも雲行きが怪しくなる。北のほうをみればなんとなく雲がどんよりとしている。昨日までは、感じなかったが、大分北に来たのか、外気が冷たくなって来て



いる。ネブラスカは雪だという。

Jefferson シティをでるころは 49° F あったのが、気温が下がり、29 号線 2 号線が心配だ。

やがて、カンザスに来ると外の気温が 39° F と表示されている。北の空がドン曇、時々小雨がぱらつく。が、まだこの頃はたいしたことはなかった。ところが、カンザスシティを乗り越し、29 号線に入るところには、38° F。そして、St.

Joseph のあたりでは、32° F まで下がってきている。これはたいへんだー。と思っているうちに小雪になってきた。さあ、いよいよ、これからがたいへん。まだ、ネブラスカまでは大分距離がある。

暫く走っていたが、まだ、対向車線の北から来る車は雪を被っていない。たいしたことはないだろうと思っていたが、そのうち、前が見にくいくらい雪が降ってきた。雪かきの車も出ているようであるが、雪は次々に降ってくる。みんなが徐行運転を始めた。追い越し車線を勇敢に飛ばしていく車もあるが、これは四駆のピックアップトラックばかり。乗用車でスピードを出すのは危険だ。というわけで、前の車のあとをぴったりつけて、安全運転を心がける。アイオアに入り、10mile ほど



でネブラスカへの 2 号線にはいる。29 号線は平らなミズーリ平野を走っており、また、トラックも多いので、重量のある彼らが雪を固めてくれる。ところが、2 号線は車の数が少ない。その上、結構坂道がある。これは、苦勞をするだろうと覚悟を決め、ネブラスカシティに入る前のトレーラーステーションで、一休み、ガソリンを補給し、気合を入れることにした。

さて、いよいよ、雪の中を出発である。案の定、雪が降り出して急に温度が下がったと見えて、道路は半ばアイスバーンになっているところもある。ところが、ピックアップのトラックは勇敢にも、ここを 50 マイルくらいで平気で走っている。

このネブラスカシティからリンカーンまでは、約 50 マイルある。時間はすでに四時を



回っている。しかし、スピードは出せない。安全運転を心がけ、40 マイルで走る。この分では、リンカーンにつく頃は暗くなっているかも知れない、とやや焦り気味。

かなりイライラの状態での走りが続く。そして、あと、40 マイル、あと、30 マイルと距離計を見ながら、時間との勝負を始める。雪の状態がよくなってきたのが、回りの車が 50 マイルで走っているのを、

ついつい、私も 50 マイルで走行。とその途端、前を走っていたワゴンが、雪でスリップ。車が、横になった状態でスーッと滑っていく。ハンドルを必死に操作しているのであろう。今度は、反対向きになったまま、滑っていく。そして、中央の分離帯の方へ行き、今度は、反対側の路肩のほうに滑っていく。その路肩から外れると土手を滑り落ちる形になる。が、運良くこの車、一回転半して、危うく、土手から落ちる直前で停止した。中から運転手が降りてきて、まさに青い顔をしている状態。こんなスリップ事故を間の辺りに見て、クワバラクワバラ。すこし時間はかかっても、安全運転、安全運転に越したことはない、自分に言い聞かせる。とそこまではよかった。自分も速度を 40mile に落とし、暫く走っていた。ところが、どうしたことか、こんどは自分の車がスリップし始めた。突然、ハンドルが聞かなくなり、車が滑り出したのである。車はスーッと路肩のほうに



よって行く。これでは、いけないと必死でハンドルを切る。が、急ハンドルは危険と、ゆっくりハンドルを回すが、少しも向きが変わらない。これでは突っ込むぞと、もう一度、思い切りハンドルを切る。すると、こんどは、中央分離帯のほうに真っ直ぐ向かっていく。ブレーキを踏んでもスピードは一向に落ちない。いけないと思いながら、また、ハンドルを逆に切る。すると、またしても、路肩のほうに向かつて車が滑り出す。なんてこった。何とかしてくれ。右に、左に首を振られて、全く自由が利かない状態。このままでは、土手から落ちてしまう。と、またしてもハンドルを必死に切る。と、ガッガッーとスピードを落としながら、中央分離帯の中に突っ込んでいく。ここは、下か芝生になっているところで、そのおかげで車が漸く止ってくれた。まさしく、止ってくれたという感じ。助かった。と胸をなで下ろした。後続の車は、この間、ずっと私の必死の苦闘の状態を見ていた

のであろう。やっと止った私の脇をゆっくり、ゆっくりと通りすぎていった。さて、さて、いよいよ、この中央分離帯のなかに突っ込んだ車。動いてくれるかどうかが問題である。まず、止った状態でうっかり、前進してスリップでもしてしまったら、もうそれで終りと、ここはとりあえず、バックにギアをいれて、下がるかどうかを試してみた。すると、車が動くではないか。「しめた。これなら、まえにも動くかも知れない。」とおもむろに、まさしく、恐々とはこういう状態を言うのかも知れない、ギアをドライブにいれ、アクセルを踏む。思った通り、やはりスリップをしているが、車は少し前進をしたようである。ゆっくり、ゆっくり、前にでて、何とか、この中央分離帯の芝生の中から出ることができた。が道路にでて、車のスピードを上げようとしたが、アクセルを噴かしても、車が前に進まない。これは、どうなっているのか、一瞬自分でも訳が分からなくなったが、其れでも何とか、車の向きを正面に向け、のそり、のそりと走り出す。もう、恐ろしくて、スピードが出せない。そんな状態だと、路面が凍りついているせいか、余計、スリップしている状態。すぐ後ろに、別の車がついてきたので、これに道をゆずろうと、追い越すようにハザードランプのシグナルを送ったが、後ろの車もスピードが出せないとはばかり、ハザードランプをつけている。しかたなく、徐々にスピードを上げる。すると、車も普通どおりに走るようになった。其れでも、40マイルでスリップしたのだから、せいぜい、30mileのスピードしか出せない。これでは、リンカーンにつく頃には、暗くなってしまうと覚悟。暫く走っていると、あちこちにトラック、乗用車が雪の中に突っ込んで止まっている。今は雪となっているが、この辺り、降り始めの一時、フリーズドレインの状態ではなかったのか。だから、新雪の下の道路が凍った状態になっているのだ。そのため、この辺りだけがスリップするのである。雪になってしまえば、こちらの雪はさらさらしているので、スリップをすることは少ないのだが……。と、そんな言い訳を考えながら運転するが、思いだしただけでも、スリップしている時間が結構長かったのだ、その恐怖が蘇り、今でもドキドキする。こうして、なんとか無事リンカーンに辿り着く。正直、「助かったあー」というのが実感。

ところが、助かって帰ってきたのを待っていたのは、なんと、驚いたことに、アパートの駐車場が雪にうずもれている状態だ。自分のガレージの前も雪溜りができて、車を入れることができない。何とかしなければと、今度は、雪かきだ。スコップもないような状態で、たまたま、ガレードの中にいれてあった洗濯板程度の板切れで必死の雪かき。こうして何とか車を入れることができたものの、足腰疲れきった状態で、いざ、アパートに戻ろうと荷物を担ぎだした。そしたら、なんと町の除雪車が来て、雪を除いていた。もう一息早くきてくれれば、苦勞をしなくてすんだのに。ムカーッとしたが、でも、安全でこうして帰ることができたのだから、仕方ないかと、自分を慰めて、一件落着。

これが、準備に一週間、そして、9日間の旅の結末の一こまでした。あーっ、楽しかった。

この日のドライブ

Jefferson City -----> Osage Beach ----> Collins -----> Clinton
-----> Harrisonville -----> Kansa City ----> St Joseph ---->
----> Nebraska City ----> Lincoln

走行距離は、435mile でした。

